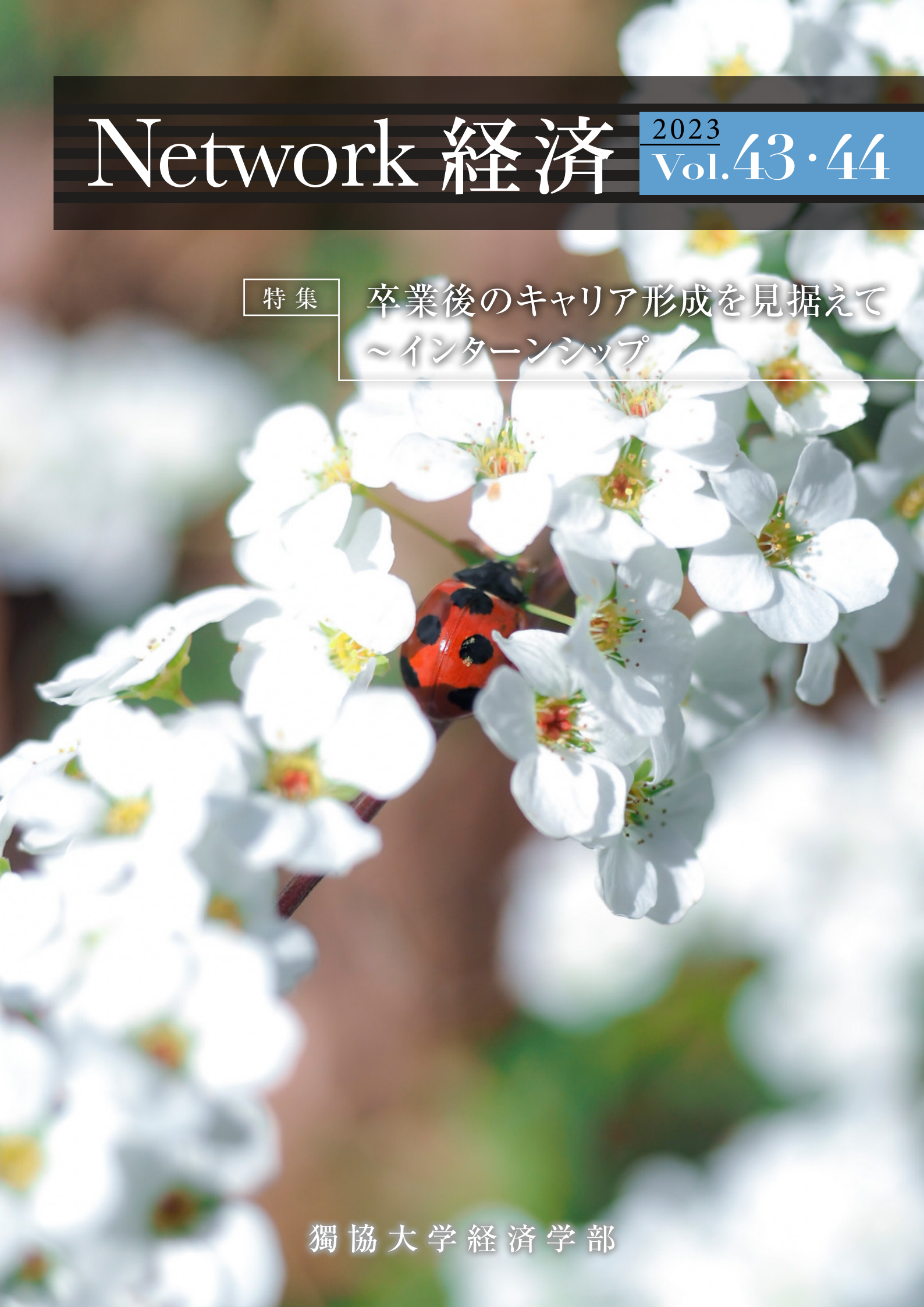
Network 経済

2023
Vol.43・44

特集　卒業後のキャリア形成を見据えて
～インターンシップ



獨協大学経済学部

CONTENTS

03 巻頭言 経済学科長　西牟田祐二

04 インタビュー
「卒業後のキャリア形成を見据えて～インターンシップ」
（付録）会社四季報とeolの活用について

10 プレゼンテーション·コンテスト開催報告

19 ゼミ活動報告

29 卒業研究概要紹介

33 学生活動報告

47 教務課経済学部係の窓口から

48 退職教員挨拶

50 教員業績紹介

巻頭言

環境問題に目覚めた夏

経済学科長
西牟田祐二

大学入学以来四十年以上住んだ関西圏を「脱出」(?)して関東圏に来て、はや2年が過ぎようとしている。通常の大学業務以外では、浅草・花川戸という所に住んで、窓から見える墨田川やその向こうに光る東京スカイツリーを眺めたり、墨田河畔を南千住の千住汐入大橋あたりまで散歩して、行き交うマラソン人に挨拶をしたりして過ごしている。また休日には縦横に張り巡らされた地下鉄や郊外電車網を使って関東各地の（あくまでも私にとっては）めずらしい所を訪れている。

関東圏と関西圏（中でも私がかつてよく過ごしていた京都）との大きな違いは、周りに山が見えないことである。ビルは見えるが山がない。関東に来て東武線を浅草駅から獨協大学前（草加松原）駅まで往復していて初めて見た山がなんと富士山だったのだ。それほど関東平野は広く、富士山は大きな山なのだ。

関東圏に来て一番訪れたかった場所は、栃木県と群馬県と福島県と新潟県に跨る高原地帯の尾瀬（尾瀬沼、尾瀬ヶ原）であった。御多分に漏れず例の、中学高校の音楽の教科書にも出てくる江間章子作詞・中田喜直作曲の歌「夏の思い出」で「夏が来れば思い出す遥かな尾瀬遠い空」と歌われているのに惹かれてのことである。一昨年の夏7月に初めて行き、昨年の初夏5月末には水芭蕉の可憐な白い花を見たいがゆえにゼミ生を誘って再訪した。関東平野を形作る大河・利根川の源流でもあるそうで、自然環境保護運動の先駆的存在でもあると知った。

これを皮切りに昨年2022年の夏休みを通して、今まで行きたくとも物理的・心理的に遠く感じて行けなかった国内各地をたくさん旅行してみた。東北の秋田・青森の境にある十和田湖とその近くの奥入瀬渓流を8月の初めに訪れ、その足でずっと見たかった青森のねぶた祭を見学した。それから岩手・盛岡、平井泉・中尊寺と南下し、お盆に自宅のある比叡平（比叡山の中腹にある住宅地）にいったん戻った後は、これもずっと行きたかった熊野古道の入り口の那智勝浦に宿をとった。9月には福井県の海岸線・東尋坊を訪ね、永平寺で座禅体験をした。連年のコロナ騒ぎで夏に外国での資料収集活動が全くできなかったのは大変残念なのであるが、このように国内各地の未だ見ぬ土地を訪問できたのは昨年の夏の大きな収穫であったと言ってよい。

しかし、どこを訪れても、旅程の何日かはとてもひどい雨にたたられたのが昨年の夏であった。青森市の後は弘前市を訪ねる予定が大雨により列車が不通となって行けなかったし、福井からの帰りには土砂降りの鯖街道を車でほうほうの体で逃げ帰ったという次第である。加えてテレビをつければ、山岳地帯で有名なパキスタンで大洪水が起きたという。「ええっ!?なんで??」その理由は地球温暖化のせいで頂上付近に存在する氷河湖が溶融し始めたのだそうだ。

それらに尋常でないものを感じ取った私は、夏の終わりに、古い本棚から、昔読もうと思って買ったのに不覚にも読んでいなかった、そして近年（2014年）逝去されたと聞いていた大経済学者・宇沢弘文氏の岩波新書『地球温暖化を考える』（1995年刊）を引っ張り出し、一心に読み始めていた。その内容のなんと予言的なのか!

自動車工業を中心に近現代の経済史を研究することが自分の日常的な研究活動であった私には、人類の工業活動がどれほど自然環境に大きな負担をもたらしていたのか、それがついに「人新世」と呼ばれる地球の隅から隅までをがんじがらめに覆ってしまう時期に来てしまったことへの自覚がとても足りなかった。今更反省しても遅いかもしれないが、ハーバー=ボッシュ法による空気中の窒素の大電力を使っての人為的なアンモニア合成、それによって爆薬と窒素肥料を大量に作り出す工程が、ひょっとしたら人間と自然との物質代謝を致命的に攪乱する全く不必要なものだったのかもしれないとの疑念が私の頭の片隅に輪のように広がって行くのを禁じることができない。

それからというもの、以前からこの環境問題をも視野に入れて真剣に論じていた論客たちの著書『分解の哲学−腐敗と発酵をめぐる思考−』（藤原辰史、2019年、青土社）、『動的平衡−生命はなぜそこに宿るのか−』（福岡伸一、新版2017年、小学館）、『大洪水の前に−マルクスと惑星の物質代謝−』（斎藤幸平、2019年、堀之内出版、文庫版2022年角川ソフィア文庫）等々を遅ればせながら熱心に読み、ゼミ生とともに地球環境問題とそのために人間ができることを日夜考え続けているのが今日このごろの私である。

インタビュー
「卒業後のキャリア形成を見据えて～インターンシップ」

企画趣旨

本特集記事では、学生の就職活動における「インターンシップ」をテーマとして取り上げます。本誌前号（41・42号合併号）の特集記事『座談会「経済学部生の就職活動と大学生活の送り方」』では、就職活動（以下、「就活」と略す）の内容を広く扱いましたが、今回はインターンシップ（以下、「インターン」と略す）に焦点を絞り、就活ひいては今後のキャリア形成におけるインターンの重要性などを紹介します。また、就活での企業選びや面接対策で使える本学図書館が契約しているデータベースについても最後に紹介します。

近年、就活におけるインターンの内容は多様化しています。本来、インターンは就職後の業務内容と就業者の希望・能力のミスマッチを防ぐことなどを目的に始まりました。しかし、近年では「企業説明会」のような形態をとるインターンが増加し、その参加が本選考に応募するための必須の条件であったり、早期選考・特別選考の入口であったりし、学生の間でもインターンは「内定獲得への近道」として捉えられている傾向があります。本記事では、就活を控えた在学生（特に就活が本格化する前の１、２年生）の皆さんに、本来のインターンの意義（「どういう職業に就いて、どういう人生を送りたいのか」、「自分が何に向いているのか、また何に向いていないのか」を考えるキャリア形成の１つの機会）を再確認してもらいたいと考えています。

本記事では、卒業間もない経済学部の卒業生２名に対して現役生がインタビューを行っています。インタビュウィーのお二人は、いずれも在学中にインターンに積極的に取り組み、その経験から就職先を決めていますので、インターンでの経験やそれが職業選択に与えた影響などをお話しいただいています。人それぞれ自身のキャリアで「何を目標とし、何を大切にするか」は異なりますので、お二人の経験やそこから得られた考えはすべての人に当てはまるわけではないでしょう。しかし、これから就活やインターンに取り組むうえで、先輩の経験を知り、そこからヒントを得ておくことは大切です。また、偶然にもお二人には共通した意見（インターンに早めに取り組むことが重要であること、インターンでの経験・失敗を次の行動の方針転換や改善につなげていることなど）も多々ありました。

本記事が皆さんの実りあるインターン・就活の一助になればと思います。

インタビュワー（敬称略）

経営学科3年 松本ゼミ	清水（シミズ） 優志（マサユキ）
経営学科3年 山﨑ゼミ	月田（ツキダ） 光輝（コウキ）
経営学科3年 松本ゼミ	羽鳥（ハトリ） 怜（リョウ）
経営学科3年 山﨑ゼミ	横山（ヨコヤマ） 翔馬（ショウマ）
経営学科3年 山﨑ゼミ	渡邉（ワタナベ） 紘夢（ヒロム）

インタビュウィー（敬称略）

アサヒ飲料株式会社勤務 2021年経済学科卒	三代（ミヨ） 圭佑（ケイスケ）
企業情報サービス会社勤務 2022年経営学科卒	鈴木（スズキ） 蒼（ソウ）

インターンシップの定義・目的・内容

インターンシップとは、「在学中の一定期間に仕事に関する理解を深め、自己の職業観を養うため、企業または官公庁の職場等において就業体験をすること」であり、１～３年生の内に積極的に参加することが望ましいとされている。インターンシップの目的として、①業界や企業、職種を理解し、社会の仕組みを学ぶこと、②実際に仕事を体験し、社会人の方々と出会うことで、働くイメージを持つこと、③自分はどんな行動ができたのか、またできなかったのか、自己理解を深めること、④卒業後の進路を考え、大学生活の過ごし方に反映することが挙げられる。インターンシップの内容には、実際に職場で業務の一部を体験してみる「就業体験タイプ」や、業務改善や業務に関わるテーマに沿った課題に取り組む「グループワークタイプ」、企業紹介や先輩社員との座談会を中心とした「セミナータイプ」がある。

※本学キャリアセンター作成の「インターンシップガイドブック（2022年版）」に基づき記述

不得意だったことが「好き」に、そして現在の職業に…

アサヒ飲料株式会社勤務　三代 圭佑さん(2021年3月経済学科卒業)

就活時のインターン活動

―三代さんの就活の経緯を参加されたインターンの内容を中心にお聞かせいただけますか。

三代:本格的に就活に取り組み始めたのは、コロナ禍前だった大学2年生の3月で、友人を誘って合同説明会に参加したのがきっかけでした。インターンは、大学3年生の5月に製薬会社の3日間のインターンに参加したのが初めてでした。

当時、希望職種の1つに製薬会社のMR職(病院等に対して自社の医薬品の採用を働きかける営業職)がありました。そのインターンは、「アフリカの遠い地に医薬品をできるだけ早く届けるにはどうしたらよいか」というテーマが与えられ、解決策をグループで考え、発表するというものでした。参加したもう一つの製薬会社のインターンは、3日間の泊まり込みで行われ、「自社の医薬品を情報を使っていかにお医者さんに採用してもらうのか」という戦略を考えました。ほかにも、希望職種の1つだった企画に関する食料品メーカーのインターンでは、午前中にマーケティングの知識を与えられて、午後にそれを使った分析から新商品を提案することが課題として与えられました。

職業体験ができた本来の意味でのインターンには全部で十数社は行ったと思います。**企業説明会や選考を兼ねたインターン**も含めれば、数えきれないほど行きました。最終的に内定がもらえたのは、覚えている範囲では現在の勤め先であるアサヒ飲料のほか、製薬会社2社、保険会社、食品・医薬品の専門商社から内定をもらいました。多いように思うかもしれませんが、36社にエントリーしての結果なので、それほど勝率は良くないと思います。現在は、アサヒ飲料で営業職をしております。

自分では選ばない選択肢をインターンで経験

―インターン先はどのように決めましたか。また、インターンの参加時に気を付けたことはありましたか。

三代:私の場合、やりたいことが大体決まっていたので、インターン先を決めるのも早かったと思います。当時、「就活の軸」の1つとして、「その仕事が世の中になくてはならないものか」という視点を持っていました。私は大学2年生の時に病気に罹るという経験をして、そのような状況の中で「より良い世の中を作る」というよりも、「自分と同じように苦しい人が少しでもいなくなること」に携われる仕事や、**世の中になくてはならない仕事に就きたい**と考えるようになりました。ですから、人間が生きていくうえで必要不可欠な食料品、医薬品、保険といった業種に自然と絞られていきました。

あとは、当時の自分が希望する職種から何となく外していた「**やりたくないこと**」**もインターンで挑戦**しました。というのも、就活の相談に乗ってもらっていたキャリアセンターの方やゼミの先生からそういうアドバイスをもらったからです。「経験したこともないことを、「やりたくないこと」と決めつけてしまうと、選択肢を狭めることになるよ」という意図だと思います。実際にそのようなインターンに参加して、とても勉強になりましたし、惹かれる部分もありました。

▲インタビューに応じる三代さん

たとえば、何となく自分のなかで「IT系のベンチャー企業に務めている人とは合わないかな」と思っていたのですが、そういった企業のインターンに参加したときに自分のことをよくみてくれる社員の方がいてイメージが変わりました。また、その企業ではボードゲームを使ったグループワークが行われたのですが、私は当初、「面白いことをさせて人を集めるだけだろう」と高を括っていたのですが、社員の方からボードゲームでの立ち回りをみることでその人のスキルを判断していることを聞かされ、ちゃんと物事には目的があることに気づかされました。その経験から、私は常に物事の目的や、相手の行為・発言の先に何があるかを考えるようになりました。

インターンでよく行われるグループ・ディスカッションもテーマが重要なのではなくて、どういう立ち回りをするかが大事だと思うんです。ただやみくもに焦って発言するのではなく、全体を俯瞰的にみて話をまとめたり、意見をまとめる方法を提案したり、時間に気を配ったりすることが求められていると思うので、そういう立ち回りをすることが大切なんだと気づきました。

インターンで変わった自分の「好き」・「得意」

―そのほかにインターンを通じて得たものはありますか。

三代:私は元々、マーケティングや企画といった職種が第一希望だったのですが、インターンに参加して人と話す面白さを知って、営業職も悪くないなと思うようになりました。私は**もともと人と話すのが苦手だった**のですが、泊まり込みのインターンで二人一部屋になったときには否が応でも話さなきゃならないですよね。そうでなくてもインターンでは初めて会った人や、目上の社員の方と話さ

なければならない。そのような状況に置かれて、相手と話しているうちにだんだん打ち解けてきて、自分の悩みや焦り、辛いことを話すと共感してくれて…。そうしているうちに、自分のことを話すことで自分のことをわかってくれる人が増えていくのが楽しくなって、**人と話すのが好きになっていきました**。実際に、いまは外部の人と話す機会が多い営業職に就いていますし…(笑)。いまも大人数の前で話すのは苦手ですが、一対一の関係を築くのは得意なので、そういった関係をどんどん繋いでいくことで、仕事もやりやすくなります。

逆に、マーケティングや企画の仕事を体験できると期待して参加したインターンでは、意外とタイムスケジュールやタスクの優先順位付けなどの話ばかりをされて、興味がなくなったのも覚えています。事務処理系のインターンでは、パソコンをカタカタと叩いてデータを整理するような内勤の仕事は、**やはり自分には向いてないな**と確信を得ました。

あとは、先程もお話ししたとおり、製薬会社のMR職を希望していたので、大手から中堅まで幅広い製薬会社のインターンに参加したのですが、どこもMR職で求められることは同じだったり、大手よりも中堅の方が面白そうだったりして、やりたい職種・行きたい業界がはっきりしていれば、あまり**企業の規模は関係ない**のかなとも思うようになりました。

インターン先で知り合った就活生から自分が参加しなかったインターンの話が聞けるのも参加したからできることで、**情報交換の場**としても有益だと思います。情報収集という面では、企業の福利厚生や給料などは、公開されている情報よりもインターンで知り合った社員の方に聞いた方が実態をつかめると思います。

就活は「権力のキャッチボール」、恐れるな！

―インターンを検討している学生や就活を控えている学生にアドバイスをお願いします。

三代:インターンは就活での**自分探しの最大の場**だと思います。就活を遅く始めて後悔する人はいても、早く始めて後悔する人がいないのと同じで、インターンも**早く始めて後悔はない**と思います。焦る必要はありませんが、自分の適性や就活の軸を見つけるためにも早く取り組むことが大切だと思います。

職業体験ができそうもない1日だけのインターンでも、参加してみると参加者だけを対象とした長期のインターンが用意されていたり、エントリーシートの免除といった本選考時の特典がもらえたりするので、それだけでも行く価値があると思います。勇気をもってまず一歩を踏み出してほしいと思います。動いた先に必ず答えがあるので、前向きに取り組んでください。インターンには、**学生と会いたがっている社員の方や同じ思いを持った仲間がたくさんいる**ので、怖がる必要はないと思います。

あと、私は「**就活は権力のキャッチボール**」だと思うんですね。エントリーシートを出す段階では、学生が日本中の企業から選ぶ権利を持っている。でも、一度エントリーを出すと、今度は企業がその人を面接に呼ぶか否かを決める権利を握る。面接に行くか否かは学生が決め、内定を出すか否かは企業が決めるといった感じで…。何が言いたいかというと、**学生は「選ばれる立場にあると考えるのではなく、常に選ぶ立場にもある」と思って就活すると良い**と思います。インターンは学生が企業を選別する場でもあって、インターンの課題を知ることで、その企業が内定を出す人に求めている能力もわかったりします。仕事を早く「こなす」スキルを見ているような企業は、内定を出す人にもそういう能力を求めている可能性があったりするので…。そういったことから希望の就職先を選ぶのも悪くないと思います。

▲インタビュワーとともに（左から月田さん、渡邉さん、三代さん、羽鳥さん）

インタビュワーの感想

月田さん

インターンには参加していますが、三代さんの話を聞き、自分は参加すること自体が目的になってしまい、視野が狭くなっているなと感じました。広い視野を持ってさまざまな業種のインターンに参加して、自分に向いた仕事を見つけ、より良い進路の選択に繋げていきたいと思います。

羽鳥さん

三代さんが就活を通して大きく変化し、人格的にも良い影響があったと聞き、驚きました。当初は、今回のインタビューを通じて自分の就活に活きるような情報収集ができれば良いと考えていましたが、実際は就活だけでなく人生設計を考えるための良い経験になったと感じています。

渡邉さん

三代さんのインターンの活用法は、自分にとっては非常に新鮮で魅力的でした。内定に直結することだけを目的に参加するインターンでは、決して気づけないであろうポイントがあることを知り、大変勉強になりました。

働いている自分の具体的なイメージを持つために

企業情報サービス会社勤務　鈴木 蒼さん(2022年3月経営学科卒業)

就活時のインターン活動

―鈴木さんの就活の経緯を参加されたインターンの内容を中心にお聞かせいただけますか。

鈴木:本格的に就活に取り組み始めたのは、大学2年生の3月でした。自己分析をしたり、ゼミの先輩の話を聞いたりすることから始めました。インターンでも、内定に直結する本選考でも、業界選びや企業選びをしておく必要があるので、先に就活の軸を持とうと思ったからです。

インターンに関しては、大学3年生の6月に参加した人材サービス会社の3日間のインターンが初めてでした。そこでは、職業体験というよりも就活全般に関わる自己分析などを学びました。長期のインターンだと、そのほかにも9月頃から社会人向けのeラーニング教材を販売するベンチャー企業の長期インターンに参加しました。それは半分アルバイトのようなもので、週に3日、電話営業で商材を売り込む仕事を体験しました。あとは、現在の勤務先のインターンにも内定をもらう前ともらった後に参加しました。内定をもらう前のインターンでは、商材理解を深めるワークに3日間かけて取り組みました。内定をもらった後のインターンは、実際の業務に同行するようなインターンでしたが、早めに仕事に慣れることを目的に参加していました。

短期のインターンも含めると、40～50社は行ったと思います。周りの就活生と比べても多い方だとは思いますが、私が3年生のときはちょうどコロナ禍に入ったばかりの時期で、授業もほとんどがオンデマンドでしたので時間を作りやすく、またインターンもオンライン開催がほとんどだったので参加しやすかったんです。1日3社のインターンに参加したこともありました。でも、いま思い返すと業界の説明に終始するようなインターンも多く、そこまで行く必要はなかったなと思います。

現在の勤務先では、新たな販路や顧客を探している企業に対して、顧客となりそうな企業のリストを自社のデータベースから提供する業務に携わっています。私は、既存顧客からの問い合わせに答えたり、データベースの活用方法や新たなサービスを紹介したりする「カスタマー・サクセス」という仕事に就いています。

職種の細かな違いや会社の雰囲気までみる

―インターン先はどのように決めましたか。また、インターンの参加時に気を付けたことはありますか。

鈴木:私の場合、漠然と「人と直接話せる」仕事に就きたいと考えていたのと、どの会社に行っても営業職はあるので就活で有利に働くかなという期待もあって、**営業職を中心にインターンに参加**していました。少し変わったインターン先の探し方としては、「オファーボックス」や「キミスカ」のようなサービスを使っていました。**自分のプロフィールを登録しておくと、企業側からメッセージが来るという就活に関するサービス**です。現在の勤務先もそれを通じて声をかけてもらい、インターンに参加したのがきっかけでした。

インターンに参加するときは、「**自分がどの職種に合っているかを把握すること**」を意識していました。たとえば、「営業職」と一括りに言っても、ルート営業(既存顧客への営業)や飛び込み営業、電話営業などがあるので、まずは営業職の全体像を掴むようにしました。それから自分に向いていそうな仕事内容を自己分析とも照らし合わせながら考えるようにしていました。たとえば、電話営業の仕事はインターンで体験してみて、これを一日中仕事として取り組むのは自分には辛いなと気が付くことができました。

▲インタビューに応じる鈴木さん

あとは、「**その業界を知るというよりもその会社を知ること**」を意識していました。私の場合、『業界地図』などを見ても特定の業界に興味が持てなかったんですね。また、実際にインターンに参加してわかったのですが、同じ業界内の企業であれば業務内容はそれほど変わらない。それなら、**その会社で得られるスキルや会社の雰囲気を重視**した方が良いのではないかと考えるようになりました。たとえば、どの業界やどの会社でも求められるようなチーム・マネジメント力や提案力が身に付くかとか、上司と部下の関係性はどうかといった点です。余談ですが、そういったところに視線が向いていると、本選考時でも「なぜ他社ではなく、うちに来たいの?」と聞かれたときに、答えられるようになります。

いまの勤務先に関しても、社会人に話してもわからないような業務を行っているので、インターンに参加して具体的な業務を知ることができたのは大きかったですし、実際の業務に同行することで仕事を通じて得られるスキルや会社の雰囲気も知ることができたのもかなり大きかったと思います。

そういった意識をもってインターンに参加したことで、就活の軸も変わっていきました。最初は漠然と「人と直接話せる」仕事に就きたいと考えていました。たとえば、人材サービス会社のインターンに参加したのも、「人の人生に貢献したい」と考えていたからです。でも、その業務には一定期間内に「何人を就職・転職させないといけない」といった**数字(営業目標や成績)が付きまとう**ことをインターンを通じて知り、そうなってくると「その人の今後の人生を

一緒に考えることは難しいのではないか」と考えるようになりました。そこからは、「世の中に価値を提供できているか」という新たな軸に変えました。

自己理解を深め、本選考でしっかり伝える

―そのほかにインターンを通じて得たものはありますか。

鈴木：本選考が始まる前に、さまざまなインターンに参加したことで、自分自身を深堀りできましたし、伝え方のノウハウを早めに得られたと思います。本選考では、どの会社もエントリーシートの提出を求めるでしょうが、それもインターンの応募で一度経験してみることが大切で、もし選考で落とされたのであれば先輩などにみてもらって修正することができます。本選考の面接では、自己PR、自己紹介、ガクチカ（学生時代に力を入れていたこと）、就活の軸といったことはどの会社でも聞かれますが、**インターンで場数を踏んで慣れておくことと、そこでの経験・失敗を通じて深堀しておくことが重要**だと思います。

私の場合、ガクチカや自己PRでは、ゼミ活動でのコミュニケーションの苦労などを書きましたが、業種や会社によってエピソードは変えずに強調する点だけを変えたりしていました。たとえば、経理職に応募するのであればコミュニケーション能力を強調しても仕方ないですし、営業職なら巻き込み力やまとめる力をアピールした方が印象が良いですよね。そういったことに早めに気が付くことができたのはインターン参加の1つの成果だったと思います。本当に行きたい会社の本選考の前に、ある程度は**場慣れしておかないと自分をちゃんと伝えられない**ので、そういった意味でもインターンの参加は重要だと思います。

あとは、**インターンには限界もある**ことを知っておいたほうが良いと思います。インターンに参加したからと言って、仕事内容や会社の雰囲気のすべてが理解できるわけではありません。たとえば、インターンで体験できる仕事の多くは、学生でも対処できるような比較的容易な仕事で、実際にはもっと難しかったり、仕事量が多かったりします。だからこそ、仕事の内容が自分に合うのかをインターンでしっかり見極める必要があると思います。職場の雰囲気も人によって違うので期待しすぎないことが大切です。「残業なし」という一見良さそうな勤務条件も、早めに対処しなければならない仕事や片づけたい仕事があるときにそれができず、かえって問題が大きくなってしまうことがあり、仕事のしにくさに繋がったりします。

焦らずマイペースで！でも失敗を繰り返すな！

―インターンを検討している学生や就活を控えている学生にアドバイスをお願いします。

鈴木：まずは興味のある企業のインターンに気軽に参加したらいいと思います。でも、参加して満足するのではなく、必ず目的をもって参加してください。この業界・会社は何をしているか、職種が自分に合っているか、会社が自分に合っているか。そして、参加している間や参加した後に、その**目的がしっかり達成できたかを確認**してください。その振り返りがないと、同じようなインターンに参加し続けることになり、成長もしませんし、次のステップにも進めません。その試行錯誤が、**新卒時の就活のみならず、その後のキャリア選択にも繋がってくる**と思います。内定獲得のためのインターンだけではなく、その後の長いキャリアにつながるようなインターンにしてほしいと思います。

▲Zoomで行われたインタビューの模様（左上：清水さん、右上：鈴木さん、左下：渡邉さん、右下：横山さん）

あとは、周りの就活生と自分を比べて焦らないということです。周りで内定者が出ると焦りが出てきますが、他人より先に内定がもらえるかなんてあまり意味のないことで、むしろ**自分はどんな人間で何がしたいのかをじっくり考えることが大切**だと思います。そのためにも、インターンは重要だと思います。これから何十年も働くなかで、仮に新卒で入った会社が失敗であったとしても転職すればよいわけですから、就活自体も重く捉える必要はないように思います。**とにかく自分のペース**で頑張ってください。

インタビュワーの感想

清水さん

就活はいつもぼんやりとしていてイメージがつきづらい部分がありましたが、鈴木さんのお話を聞けて、全体像や企業を選ぶポイントなどをさまざまな視点で考えられるようになりました。最終的には、得られるスキルや一緒に働く人を重視して就職先を決めるという点は、他のどのような志望動機よりも自分の中で腑に落ちたので、これからの就活に活かしたいと思います。

横山さん

鈴木さんの話を聞いていて、自分のことをしっかり分析して話されているのが印象に残りました。失敗をしても、それを分析し、次に生かして就活を行っていたことが伝わってきました。失敗を恐れず行動し、その分析をするというサイクルを繰り返して、就活に励みたいと思います。

渡邉さん

ただ漠然とインターンの数を積むだけでなく、明確な目標設定とその振り返りが重要であることを再確認できました。また、就活に焦っていた自分にとって、鈴木さんの「焦るな」という言葉には、非常に救われたように感じます。今後は、決して焦ることなく、且つ着実に自分の目標に向けて進んでいきたいと思います。

契約データベース(「会社四季報」(東洋経済新報社)と「eol」(プロネクサス))の紹介

文責:松本 守

突然ですが、NHKドラマ「舞いあがれ!」をご存知でしょうか?ヒロインは旅客機のパイロットを目指す舞(福原遥)さんで、その脇を固める出演者も、飛ぶ鳥を落とす勢いの目黒蓮(Snow Man)さんや赤楚衛二さんなど、豪華な顔ぶれとなっています。その中で異彩を放つ存在として、ヒロインの舞さんのお兄さん役で悠人(はると:横山裕(関ジャニ∞))さんがいますが、ドラマの中でどういうことをしていると思いますか?

この悠人さんは東京大学に進学後、デイトレーダー(短期の株式投資家)となり、在学中に2,000万円を稼いだという設定です。ドラマの中で時折出てくる、悠人さんのデスクを見ると、分厚い赤い本が置かれているシーンがあります。実は私も全く同じものを持っているのですが、この赤い本には「会社四季報」という文字が確認できます。

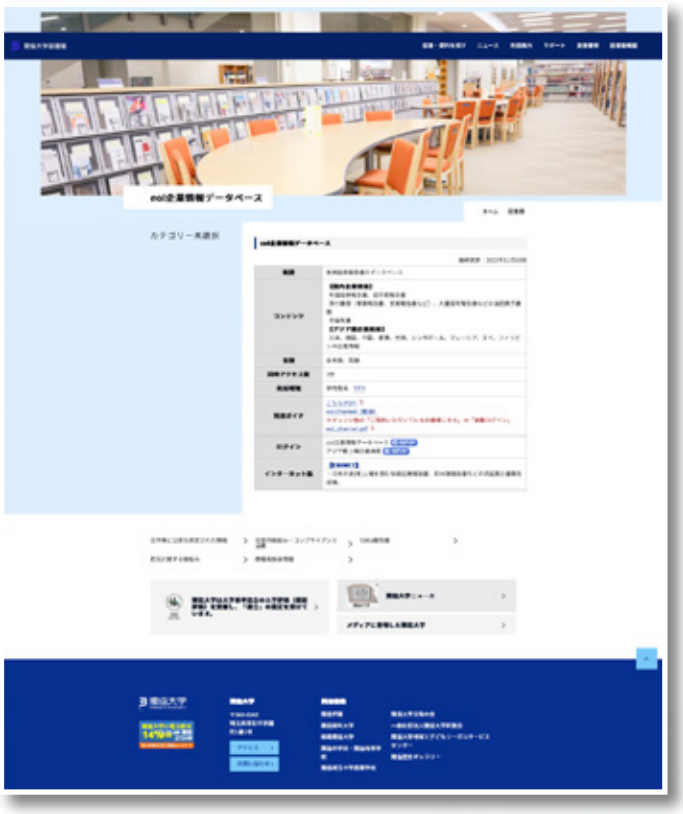
ドラマの中で触れられることはありませんが、この「会社四季報」(約2,000ページ、2,300円程度、4ヶ月毎刊行)という本は、株式投資のバイブルとして有名なものなのです。また、上場企業であれば、営業先や取引先の経営・財務状況を知ることもできるので、多くのビジネスマンに重宝されている情報誌でもあります。

もちろん、この「会社四季報」は就職活動を控えているみなさんのような大学生の武器とも言えるでしょう。例えば、いつ創業したのか?、社長は誰か?、どのような株主がいるのか?、最近の業績(売上高や当期純利益など)はどうか?、どのくらい借金(有利子負債)をしているのか?、どういう企業(取引先)と付き合いがあるのか?、社員の給料(年収)はいくらか?、社員の年齢はどうか?、などについて、容易に知ることができます。当然、この「会社四季報」は有料なのですが、実は獨協大学の学生さんは無料で(Web上で)見ることができます(費用は大学が負担しています)。実際の就職活動での面接の際には「業績」に関する質問もあるようですので、事前に当該企業の情報を入手できる「会社四季報」は十分に使えるはずです。

話はこれで終わりません。就職活動を控えた学生さんの武器が獨協大学にはまだあるからです。それは「eol」(イーオーエル)という名前の企業情報データベースです。先に紹介した「会社四季報」はたしかに上場企業の最新の情報に触れることはできますが、あくまでも美味しいところをつまみ食いしているようなもので、その詳細を知ることはできません。みなさんはこの「eol」を使えば、上場企業が開示している様々な情報源の現物(有価証券報告書・株主総会招集通知・内部統制報告書など)に、過去から現在まで無料でピンポイントにアクセスすることができます(費用は大学が負担しています)。「eol」は大学・公共図書館の150機関以上で利用されている定評のあるデータベースです。

学生さんを対象とした、最近のアンケート調査(就職情報会社のディスコ調べ)によると(日経産業新聞、2022年1月12日)、就職先企業を選ぶ際に重視する点は「将来性がある」が約5割で最も多かったそうです。就職を希望する企業の将来性(業績や財務状況など)を知りたいという学生さんはぜひこれらのデータベースにアクセスして自分なりに調査・分析してみてください。

といっても、「自分でも簡単にできるの?」や「数字は苦手だなぁ」というように、早くも挫折してしまいそうな学生さんもいるかもしれません。たしかに、企業の内情について知るには、企業(経営)に関する数字がぎっしりと詰まっている財務諸表(≒企業の成績表)を読むトレーニングも必要でしょうし、数字として表現できない非財務情報(財務諸表で開示される情報以外の情報:有価証券報告書の「経営者による財政状態及び経営成績の検討と分析」などの定性的情報)を読み込むトレーニングも重要でしょう。でも安心してください。獨協大学経済学部には、上記のトレーニングにうってつけの講義科目(簿記原理、原価計算論、財務会計論、管理会計論、社会会計論など)が準備されていますので、ぜひ履修して勉強してみてください。もしかすると、まだ注目されていない掘り出しもの(企業)と出会えるかもしれませんよ。



第10回 経済学部 プレゼンテーション・コンテスト 開催報告

～3年ぶりの天野貞祐記念館大講堂での開催～

概 要

第10回経済学部プレゼンテーション・コンテスト（以下、プレコン）が2022年11月16日（水）、天野貞祐記念館大講堂で開催されました。大講堂での開催は3年ぶりとなりました。

プレコンは、（1）学生の問題解決型プレゼンテーション能力の向上、（2）研究活動・ゼミ活動の成果の紹介などを目的に、2013年度に新設されました。今回は、7つのゼミから計21件の参加申し込みがありました。学生支援制度実行委員会で慎重に審査した結果、その中から7グループを本選出場グループとして選出しました。本選では、登壇者の皆さんは普段の教室とは雰囲気の異なる大講堂での発表となり、緊張した面持ちで臨んでいるように見えましたが、どのグループも、技法・内容ともにレベルが高く、素晴らしい本選となりました。

厳正な審査の結果、以下のグループと個人にそれぞれ賞状と顕彰金が授与されました。

審査基準

● 内容（課題設定、論理展開、革新性、実現可能性） ● プレゼンテーション（言語表現、ストーリーテリング、資料等の完成度） ● チームワーク（チームビルディング） ● 全体的評価

審査結果（各賞ゼミ・氏名50音順）

最優秀賞

米山昌幸ゼミ　食と農を考えようプロジェクト「獨協大学での二酸化炭素排出を抑えた食品廃棄物堆肥化の提案」

優秀賞

山森哲雄ゼミ　Aチーム「過激な罰行動を行う人々の特徴」
木原隆司ゼミ　教職女3人組「川口市で教育を受けている外国人の子どもたちの教育の向上プロジェクト」

経済学部長奨励賞

吉田翔平ゼミ　Bグループ「サブスクリプション業界における価格戦略の理論分析」

アイデア賞

堀江郁美ゼミ　「rootour」制作班「メタバースによるコミュニケーションの場「rootour」の提案と制作」

敢闘賞

鈴木　淳ゼミ　チーム佐藤「獨協大学のリブランディング」
高松和幸ゼミ　まりもとこやぎたち「ドローンを使った災害時の活動」

ベストプレゼンター賞（個人表彰）

COLAK CIGDEMさん（木原ゼミ、国際環境経済学科3年）
小束恵生奈さん（木原ゼミ、国際環境経済学科3年）

▲本選終了後に全員で記念撮影　※写真撮影時のみマスクを外しています。

獨協大学での二酸化炭素排出を抑えた食品廃棄物堆肥化の提案

米山ゼミ　「食と農を考えようプロジェクト」チーム　岡田遥高　尾内文音　菅野琴音

本選までの経緯や感想等

私たち、米山ゼミの食と農を考えようチームは、「持続可能な農業の推進や地産地消、食と農を見直すことで、自然環境・社会が豊かになること」を活動目的とし、地産地消や食品ロス削減など食と農に関する問題解決に取り組んでいます。今回のプレゼンテーションコンテストには、岡田遥高（代表：経済学科3年）、尾内文音（経営学科2年）、菅野琴音（国際環境経済学科2年）の3名で出場し、食品廃棄物に着目し、CO_2排出を抑えるために獨協大学学食での食品廃棄物堆肥化を提案しました。

まず、私たちは本コンテストに参加するにあたり6月15日に草加市環境業務センターに取材に伺いました。環境業務センターでは、コンテストの原案であるプレゼン資料を発表し、草加市の食品廃棄の現状や、食品廃棄物堆肥化についてヒアリングをしました。取材して分かったことは、草加市では、飲食店などから出る食品廃棄物を堆肥化する施設はなく、可燃ごみとして処理されていることです。草加市で、食品廃棄物を再利用する施設を作ることは難しいとのことだったので、私たちは獨協大学内から出る食品廃棄物を再利用する仕組みを作りたいと考えました。

学内から出る食品廃棄物を再利用する仕組みを提案するために、学食から出た生ごみが焼却されるまでのプロセスを調べました。調べるにあたり、学食、生ごみの運搬業者であるエスシーエス株式会社、生ごみの焼却処分をしている東埼玉資源環境組合に取材しました。そのプロセスで、どの程度のCO_2が発生するかも計算しました。現在の生ごみ廃棄方法で発生するCO_2排出量は、約900kg-CO_2であることが分かりました。

獨協大学ではすでに生ごみの堆肥化に取り組んでおり、敬和館では生ごみを乾燥させ、堆肥化し、堆肥を活用するという仕組みができています。この仕組みは、私たちの提案の参考になりました。この堆肥化の事例に関わっている大竹先生にも何度かお話を伺いました。

これらの調査をもとに、獨協大学でのCO_2排出を抑えるために、学食から出る食品廃棄物堆肥化の提案をまとめました。獨協大学内から出る生ごみを堆肥化機械で堆肥化し、完成した堆肥は大学内や草加市内での活用を目指すというものです。草加市内の堆肥の受け入れ先について、草加市都市整備部みどり公園課の関口課長にご相談したところ、「にっさと防災公園」で花を育てている団体で堆肥の需要があるとのことでした。他にも、伝右川左岸のひまわり畑、学内CLEAS南側に設置しているゴーヤのカーテンなどで堆肥の活用を考えています。そして、この生ごみ堆肥化の提案を実現することができれば、CO_2発生量が約280kg-CO_2となり、現在の処理方法の約69%に当たる約620kg-CO_2が削減できると試算できました。

また、この提案を実現していくためには、ごみの分別が不可欠となります。ごみの分別に対する意識向上も期待できるメリットとして考えられます。今後、この提案を草加市、東埼玉の5市1町へと広げていければと考えています。5市1町へと広げていくことができれば、5市1町のゼロカーボンシティ共同宣言に協力することができます。

また、埼玉県には地球温暖化対策計画制度により温室効果ガスの削減義務があります。地球温暖化防止プロジェクトのメンバーが12月8日に埼玉県庁を訪問し、温暖化対策課と資源循環推進課の職員さんと意見交換をしました。

コンテストの直前まで、パワーポイントや原稿の改訂をしており、まさか最優秀賞を受賞できるとは思っていませんでした。メンバーだけでなく、ゼミ生、米山先生の力を借りてこのような結果につながったことを、大変嬉しく思っています。

（文責：経済学科3年　岡田遥高）

指導教員（米山先生）からのコメント

チームメンバーが学食から出る食品廃棄物のごみ焼却処理について調査して、生ごみの焼却に伴うCO_2排出量はそれほど多くなく、ごみの運搬に伴うCO_2排出量の方が大きいことがわかった。しかし、生ごみを堆肥化することでCO_2排出削減を目指すこの企画は、食品に関するサーキュラーエコノミーに取り組む一つのモデルとなりうる魅力的なものとなったと思う。

この提案を、地球温暖化防止プロジェクトチームが引き継いで、埼玉県庁で行った温暖化対策課および資源循環推進課との意見交換会では、計算上は食品廃棄物の焼却処分に関してはCO_2排出量はゼロと考えるという基礎的なことや、食品廃棄物の堆肥化によるCO_2排出削減に関しては、堆肥の需要がキーになる、運搬に関わるコストやCO_2排出量を抑えるためには、その需要のある所にオンサイトで堆肥化できることがポイントとなる、というご指摘をいただいた。この提案企画の実現に向けては、生ごみから作る堆肥の品質と需要が食品のサーキュラー実現に向けての課題となることがわかった。

脱炭素社会やサーキュラーエコノミーの実現は非常にチャレンジングな目標であるが、それに本気で取り組むことが将来を担う学生を育てることになると信じている。

過激な罰行動を行う人々の特徴

山森ゼミ　A チーム　増渕佳純　平田昇輝　倪枫苹　水嶋陽向　新里真加

【報告内容】

新型コロナウイルス感染症拡大に伴って緊急事態宣言が発令されるなか、自粛をしない店に過激な暴言を含んだ張り紙を貼る、他県ナンバーの車体を傷つけるなど、いわゆる自粛警察という人々が現れました。「自粛」という規範に従わない人に攻撃を加えるこのような「罰行動」は、第3者に規範を遵守させる効果があるものの、その行動自体が犯罪行為である場合や、人々に必要以上に規範を強いてしまう場合があります。そこで私たちは、過激な罰行動の減少につなげるために、そのような行動を行う人々の特徴を明らかにすることを研究課題としました。しかし、過激な罰行動を実際に行う人々を見つけ、直接聞き取り調査を行うことは現実的ではありません。そこで私たちは、経済学や心理学などさまざまな分野の先行研究から過激な攻撃行動に人々を駆り立てる要因を調査し、自粛警察になり得る人々について複数の仮説を立てました。それらの仮説を質問紙調査によって検証した結果、自粛警察のような過激な罰行動を行う人には「40代以上」で、「長時間テレビを視聴」しており、「強い規範意識」を持ち、そして「不安やストレスを感じやすい」という特徴があることが明らかになりました。コロナ禍において政府やメディアが、国民に自粛という規範を守ってもらうための報道を行うことはやむを得ません。しかし、このような報道は、国民の規範意識や不安を高めることにつながり、自粛警察という過激な罰行動を行う人々を生み出してしまった可能性があります。政府やメディアの報道には、このような負の側面も存在するということを覚えておく必要があるのではないでしょうか。

【感想】

プレゼンテーション・コンテストを終えて、大きな達成感を感じることができました。この日までに何度も行き詰まり、グループで試行錯誤を行いながらここまで研究を進めてくることができました。優秀賞をいただくことができたのは、指導をしてくださった山森先生、いつもアドバイスをくれた山森ゼミ生、そして質問紙調査に協力してくださった皆様のおかげです。今後はこれまでの経験を活かし、3年生は卒業研究、2年生は来年度のグループ研究に取り組んでいきたいと思います。この度はこのような貴重な場を提供してくださり、ありがとうございました。

（文責：経営学科3年　増渕佳純）

指導教員（山森先生）からのコメント

社会規範から逸脱した人に対して自ら費用を払ってでも罰を与える行動を「利他的懲罰」といいます。この「利他的懲罰」は社会的ジレンマにおいて協力行動を人々に促す効果が実証的に確認されていますが、効率的な選択をした人に対しても罰が加えられるといった負の側面があることも知られています。自粛警察やマスク警察といった過激な罰行動も「利他的懲罰」の負の側面といえるでしょう。

A班の研究課題は、このような過激な罰行動を行う人びとの属性を明らかにするという大変挑戦的なものでした。先行研究を丁寧にサーベイする必要がありましたが、多くの学術論文を読み込んで理解するのはとても骨が折れる作業だったことでしょう。活動の終盤で班員が突如脱退したことも彼らにとってはかなりの痛手だったと思います。増渕さん、平田さん、倪さんの3人で挑戦したインター大会は思うような結果が残せず悔しい思いをしましたね。苦い思いが残るなかで迎えたプレコンでしたが、他班のメンバーであった水嶋さんと新里さんが自分たちの研究を中断して参加してくれたことで、3人のモチベーションは以前にも増して高まったように見えました。そして、急造のチームであったにも関わらず、見事なチームワークでプレコン優秀賞という素晴らしい結果を最後に掴み取ってくれました。普段から他班の研究にも目を配り、切磋琢磨してきた彼らだからこそできたことだと思います。彼らのこれまでの努力がこのような結果で報われたことは、指導教員として大変うれしく思います。

今回の質問紙調査では、幅広い年齢層から回答を得るため、学部学科に関わらず学内の多くの先生方に協力をしていただいたと聞きました。質問にご回答くださいました先生方に、この場をお借りしてゼミ生とともに心より感謝を申し上げます。

川口市で教育を受けている外国人の子どもたちの教育の向上プロジェクト

木原ゼミ　教職女３人組　蟻浪公実子　小束恵生奈　チョーラク・チィグデム

本選までの経緯や感想等

今回、私たちは「川口市で教育を受けている外国人の子どもたちの教育の向上プロジェクト」について、本選にて発表した。実は昨年度も別のテーマではあるものの、チョーラクと小束がこのプレコンの本選に出場している。ちなみに、昨年のテーマはというと「インドの野外排泄が減少する方法」である。そして、このテーマでアイデア賞も受賞した。しかし、今回は全く違う方向性のテーマで挑んだ。その理由としては、チョーラクが今年、日本語教育のボランティアに積極的に参加していたこともあり、その影響あってか、3人とも日本語教育に興味があったこと、そして、私自身の感情ではあるが地元に貢献したい思いがとても強かったからである。だが、それでも昨年のテーマを継続するかどうか十分に悩んだ。そして、悩んだ末に今回のテーマで挑戦することを決意した。その決め手となったのは、チョーラクと小束の地元である川口市が全国の市町村で1番外国人住民が多いと知ったことである。そこから、昨年度のアイデア賞よりも、さらにいい賞の受賞を目指して、私たちのプロジェクトが始まった。

ーWebサイト作成までの経緯ー

今回、川口市の外国人の子どもたちの教育の向上に、現時点での私たちに何ができるのかについて考えるために、まずは日本語教室に参加した。そして、その日本語教室の先生、川口市に住んでいる外国人の子どもたちとその保護者の方々からアンケートをとった。その結果、川口市に住んでいる外国人の子どもたちやその保護者が理解しやすいような、学校や教育についての情報が色々載ってあるWebサイトの作成という結論になった。実は、外国人の子どもたちと保護者は、学校や教育についての情報がちゃんと分かっていなかったのである。だからこそ、私たちがWebサイトを作成して、それらを見てもらうことによって、ちゃんとした情報が行き渡り、学校や勉強のやる気が出てくるのではないかと考えたのである。現在は、Webサイトは途中までしか出来ていないが、今後も作成を行っていき、最終的には外国人の子どもたちや保護者に活用してもらえるように、これからも努めていく。

ー昨年に比べての成長ー

前にも述べたとおり、今年度はチョーラクと小束にとって、2度目のプレコンだった。だからこそ、何としてでも指導教授の木原先生に昨年に比べて成長したねと思われたかった。そのため、昨年よりも今回は特にプレゼンに力を入れて、プレコンに向けて、日々取り組んでいった結果、今回私たちは今年メンバーに新しく入ってくれた蟻浪と3人で優秀賞を受賞することができた。ここで言葉が砕けてしまうが、本当に嬉しかった。しかし、本音を言えば、最優秀賞を獲りたかった。そのため、発表された時は、嬉しさと悔しさの両方の気持ちが入り混じってて、何とも複雑な感情であった。ただ、今回のプレコンを通して、経験がどれだけ実を結ぶのかを感じた。昨年は手探りでやっていたことが今年はスムーズにできたことが思っている以上に沢山あった。しかも、今回ベストプレゼンター賞の2枠を私たちのゼミで独占した。これも昨年からの頑張りがあったからだと信じている。プレゼンテーションコンテストの経験を活かして、これから残り少ない大学生生活を有意義なものにしたいと思っている。

（文責：国際環境経済学科3年　小束恵生奈）

指導教員（木原先生）からのコメント

チョーラクさん、小束さん、蟻浪さん、優秀賞ご受賞おめでとうございます。また、チョーラクさん、小束さん、ベストプレゼンター賞のご受賞、本当におめでとうございます。同じゼミから二人のベストプレゼンターが出るのは、極めて異例のことで、それくらいお二人のプレゼンが認められたということかと存じます。それとともに、実は蟻浪さんが真ん中で二人をつなぎ、うまく全体の流れを作ってくれたからこその受賞だと思います。落ち着いた良いプレゼンでした。

前回は英語でインドの話をしてくれましたが、今回は日本語で、より身近な川口市の話でした。しかし、その分、既に多くの活動を開始し、成果が見える形になっていたことがアイデア賞から優秀賞への躍進に繋がったのではないかと思います。開発経済学のハリス･トダロ･モデルでは、既に都市に移住している同郷の人がいると、「情報提供」や「生活支援」をしてくれるので、農村から都市への移動が増えるとの理論があります。今回皆さんが行っている活動も、この理論と整合的なもので、川口市や日本への外国人の移住促進に資することが期待されます。小職は、「語学の獨協」も「外国人に対する日本語と日本社会･文化教育」者育成の分野に更に力を入れるべきだと思っています。皆さんが、そのFirst Penguinになることを祈念しています。

サブスクリプション業界における価格戦略の理論分析

吉田ゼミ　Bグループ　渡邊弘睦　松島拓生　川田紗瑛

「研究の概要」

私たちは「サブスクリプション業界における価格戦略の理論分析」というテーマで研究を行いました。年々市場規模が大きくなっているサブスクリプションの動画配信・音楽配信サービスの価格について調べた結果、音楽配信では学割価格が設定されている一方で、動画配信サービスでは学割価格が採用されていないことがわかりました。経済学では、一般に独占下ではグループ価格差別戦略は企業の利潤を増加させ、また、先行研究において競争下では学割を実施しないことが企業にとって最適であると学びました。しかし、音楽配信サービスはこれらの理論に当てはまらず、学割を実施していました。そこで、我々は音楽配信サービスにおける学割の存在は先行研究とは異なるモデルにおいて均衡した結果なのではないかと考えました。本研究は産業組織論における理論分析を用いて、モデルの設定、利潤計算、結果の分析を行うことでこの仮説を証明することができました。本研究の過程において、研究テーマを決定することに思っていたより時間がかかり、モデル設定、計算、分析まで短期間での作業になりました。夏にはゼミ合宿を行い、グループでのまとまった活動時間が確保できたことが研究の進みに大きく貢献しました。設定したモデルを元に計算し、その結果を分析するのに多くの時間がかかりましたが、3人で役割を分担して研究を進めることができました。研究結果が出た後は、プレゼンに向けての資料作りに取り掛かりました。視覚的にわかりやすいパワーポイント作り、産業組織論を学んだことのない人も理解しやすい言葉選びなどに配慮しながら完成させました。ゼミの授業時間以外でも多くの時間を研究に当て、メンバーと集まったり、先生にアドバイスをいただいたりしながら研究を終わらせることができました。本研究を通して、研究の進め方や発表の仕方、資料の作り方を学び、今後の活動の糧となる活動ができたと感じます。

「本番を終えて」

この度、私たちは経済学部長奨励賞を頂きました。プレゼンテーションコンテストに至るまでの数ヶ月間、夏合宿や授業外時間を利用して計算や分析を進め、発表を作り上げたことは大学生活の中でも記憶に残る貴重な経験となりました。スライドと台本を作るにあたり、専門用語を聞いている人に分かりやすく伝えられるように工夫しました。当日は、他ゼミの皆さんの発表を拝見し、資料作りや発表方法において参考にすべき点や自分たちの反省点を発見することができる良い機会になりました。最後になりますが、プレゼンテーションコンテストを企画・運営してくださった皆様に感謝申し上げます。今回の研究を通して学んだことを今後の卒業研究に繋げていきたいと思います。ありがとうございました。

（文責：国際環境経済学科3年　川田紗瑛）

指導教員（吉田先生）からのコメント

経済学部長奨励賞の受賞おめでとうございます。昨年に続き、研究成果の発表が評価され誇らしい限りです。リサーチクエスチョンの設定段階で、サブスクリプション市場における価格戦略の特徴を発見し、問題設定できた点は非常に素晴らしいと思います。現実にある、一見不思議な企業戦略を理論モデルを用いて説明するというアプローチは産業組織論の王道的研究といえます。通常、学部生の研究としてはあまり重視されない部分である先行研究との対比を丁寧にできた点は、研究としての価値を一層高めていると思います。プレゼンについても今年はスライドの作り込みや原稿に頼りすぎない発表など要求水準を上げましたが、しっかり応えてくれた点も評価できます。夏からのゼミ合宿での計算と分析、その後のプレゼン資料作りや報告練習など短い期間ですがハードワークを要求することになりました。しかし、研究のために行ったどの作業も（直接ではなく）間接的に将来の皆さんに必要な能力を高めていたということに気づく日が来ることを期待しています。

メタバースによるコミュニケーションの場「rootour」の提案と制作

堀江ゼミ　「rootour」制作班　登根大和　平野航多　佐藤洋一　関遼太　中陳葵　北沢彩友佳

報告内容

近年、新型コロナウイルスの感染拡大によって様々なことが制限される生活を誰もが経験したと思います。そこで私たちはコミュニケーションの制限こそが解決すべき問題だととらえました。学生は学校に通うことができなくなり、社会人の仕事は在宅ワーク化され、観光やエンターテイメントなどの業界も大打撃を受けました。獨協大学でもオンライン授業、サークル活動の制限など、通常とは全く異なる大学生活を経験しました。このようにあらゆる事で我慢を強いられ「対面での繋がりとコミュニケーションの減少」を強く実感することになりました。人々の繋がりや娯楽の大部分は、2次元のメディアであるSNSなどで代替され、現在では、よりコミュニケーションの多様化を図るために、3次元のインターネットであるメタバースが注目されています。メタバースは、オンライン上で自身の代わりであるアバターを操作し仮想空間内を自由に行動することができます。そしてこのメタバースの強みというのは、オンライン上で疑似的な対面のやりとりが可能になることで、より濃密な意思疎通が実現することにあります。結果として、個人間や企業間でのコミュニケーションを活性化させたり、NFTをはじめとするメタバース上での新しいビジネス機会が生まれています。このことから私たちは今後メタバースを利用したSNSコミュニケーションが非常に重要な鍵になると考え「rootour」を制作しました。

今回、rootourを制作するにあたり、具体的に6つの機能を搭載しました。

1. リアルなコミュニケーションを可能とする「テキスト・ボイスチャット機能」
2. 個人間でのコミュニケーションを可能とする「フレンド機能」
3. ワールドの活性化を図る「掲示板機能」
4. 円滑なコミュニケーションを可能とする「アクション機能」
5. 疑似的なプラットフォームの鍵となる「ワープ機能」
6. 非現実的なことを体験する「飛行機能」

これら6つの機能によって円滑、またユーモアのあるコミュニケーションを可能とします。加えて仮想空間ならではの体験も可能となります。現在の「rootour」は未完成でこれから新たな新機能を搭載していく予定です。

感想

今年の第10回プレゼンテーションコンテスト（以下プレコン）ではアイデア賞を受賞することができました。堀江ゼミでは、2年連続で賞を受賞することができ大変うれしく思います。プレコンに向けてこだわりを詰め込んだがゆえに、容量やスペックの問題で使用していた機器が動かなくなるなど様々な問題に直面しました。しかし、メタバースという新たな可能性を少しでも多くの人に認知してもらい、その敷居の高さを下げるべく懸命に制作に取り組みました。今後私たちは「rootour」を用いて、メタバース上のオンラインショッピングの活性化など、より実生活に即した利用方法を研究していく予定です。最後になりましたが、プレコンを企画・運営してくださった諸先生方や実行委員会の方々、制作に協力してくださった堀江先生をはじめとするゼミの皆さまに心より感謝申し上げます。

（文責：経済学科3年　登根大和）

指導教員（堀江先生）からのコメント

アイデア賞おめでとうございます!はじめてメタバース上でコミュニケーションツールを作りたいと聞いた時は、大変驚き、正直なところ完成まで辿り着くのか数々の疑問がありました。それはメタバースはまだまだ新しい技術で情報も少なく、3DゲームエンジンであるUnityを使った開発はかなり高性能なマシンスペックが要求される上に、皆さんはまだまだ初心者プログラマーだったため技術的にも多くの問題があったからです。6人という大所帯も心配の種ではありました。しかし、そんな心配をよそに、皆さんはいつも6人で仲良く、時には厳しい口調で意見を交換しながらも、お互いを認め合い、それぞれの長所を活かした役割分担で、コミュニケーションツール rootourを見事作り上げることができました。そして、それがこうしたコンテストの場で認められたということはとても素晴らしいことです。アイデアを出し合い、調べ、意見を調整し、複数で一つの問題に立ち向かい解決し、完成させることは簡単なことではありません。この経験はきっと皆さんの人生の糧となることでしょう。次は卒論に向けてさらに開発を続け完成度を高め、素晴らしいものができることを期待しています。

獨協大学のリブランディング

鈴木ゼミ　チーム佐藤　佐々木董　山田建　堀江凌賀

提案の概要

私たちのチームでは、「獨協大学のリブランディング」というテーマで提案を行いました。コロナ禍におけるリモート教育の普及、学習方法の多様化、大学の新設が進む中で、「相対的にみた大学の価値低下」という課題が発生するのではないかと考え、今回の提案に至っています。少子化の進行や大学数の増加により、獨協大学を含む私立大学の経営環境は大きく変化しています。大学の国際性に関する指標などをもとに比較した結果、「私立大学がコモディティ化しているのではないか」と考え、獨協大学が価値の向上や優位なポジションの確立を目指すためのリブランディングについて提案させていただきました。大学が社会に価値提供をしていく上で「教育に対する学生の充実感を高めること」が重要だと考え、インナーブランディングを想定したものです。提案では、「単純にロゴを作りかえる」、「語学教育を押し出す」といったものではなく、ブランドのエッセンスを重視した価値の創出を考えています。国境や社会課題を「壁」と例え、獨協大学のもつ本質的な価値は「壁を無くせる人をつくること」だと定義しました。ヒアリングをもとに、学生と大学のタッチポイントに関する複数の改善策を考案し、学内でのアンケート調査を実施しました。他人への推奨度（NPS®）などを用いた検証を行うことで、リブランディングの有効性を証明できたと考えております。

発表に向けた準備について

私たちのチームでは、発表に向けた準備の9割をオンラインで完結させています。効率的に高いアウトプットを出すため、同期と非同期を組み合わせて進めました。拡散と収束をひたすら繰り返したことで、より良いものになっていったと実感しています。進捗の共有がうまくされていたものの、工数管理に不備があって予定より遅れが生じることもありました。私たち自身の改善するべき点を把握する良い機会になりました。

発表を終えて

今回は、貴重な発表の機会をいただきましてありがとうございました。私どものプレゼンテーションは、一石を投じるような内容ではありましたが、このような機会をいただけたことを大変嬉しく思っております。当初から、このテーマについては「賛否を招くもの」、「正解の無いもの」という認識を持っておりました。決まった答え、定まったやり方がない中、よりプラグマティックで説得力のある提案ができるようにチームで努力を重ねました。しかし、「ブランド」というものは画一的な定義が無く、感覚的なものであり、定量的に論じることが難しいものの一つではあります。提案の中身に共感していただくこと以上に、大学の抱える課題や在り方について考えていただくきっかけになればと思い、取り組んでまいりました。会場にいらっしゃった方々に少しでも関心を持っていただけたのであれば、幸甚に存じます。また、他のゼミの発表を拝見し、課題に対して真摯に向き合う姿勢や行動力に感銘を受けるとともに、私たちの視野を広げることができたと考えています。共通のテーマが定められていないプレゼンテーション・コンテストだからこそ各チームの個性や叡智が表れており、非常に有意義で学びの多い時間を過ごすことができました。特に、優勝されたチームの提案は、課題から効果までの流れが明快であるとともに、定量的で説得力のあるものでした。各チームの皆様に心からの賛辞を送るとともに、ご指導いただきました鈴木先生、アンケートやヒアリングにご協力いただいた皆様、コンテストの開催に関わった全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

（文責：経営学科3年　堀江凌賀）

指導教員（鈴木先生）からのコメント

ブランディングは私の専門外で、このテーマは学生の方から提案してきたものです。書類審査を通過して本選に進出できたのはメンバーの力でしょう。プレゼンテーション当日は最初の方の発表でありながら、物おじせずに自然に訴えかけるようなスピーチができていたようです。

私のゼミでは、私の専門外のテーマであっても学生がやりたいこととして挙げてくれば最初から否定せずにまずは取り組んでもらうことにしています。これからの社会の人材として自らテーマを設定し考えて説明できるようになるべきと考えており、ゼミはその練習の場としてほしいからです。

ブランドは消費者から得られた信用や信頼がある上での目印としての銘柄という資産だと私は考えてきましたが、少々古い考え方だったかもしれません。プレゼンテーションのように、組織のこれから見られるべき姿を探り出し、他者にアピールするための手段として扱う現代的な考え方もあり得るのでしょう。未来に向かって自分たちのあるべき姿を探して具体化していく姿勢を忘れずに、これからの社会の中で活躍してほしいと願っています。このプレゼンテーションのためにご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

ドローンを使った災害時の活動

高松ゼミ　熊井登茂裕　髙田嶺太　宮城健汰　大木真桜　天谷百花　戸川緋菜　小林優香　豊岡惟日

日本は、多くの自然災害に遭ってきました。自然災害の発生は抑えることはできませんが、多くの命は救いたいと思いました。そこで災害時にドローンを導入することで多くの人の命が救えると考えました。

また、ドローン講習や免許を取得することで、普段使いのドローン利用に興味を持った。

①効率的で安全な捜索

ドローンを使って昼夜、捜索が可能になります。また危険な場所の捜索も可能になります。初期捜索で被災者のいるところにドローンで場所を特定し、その場所に救助隊が向かうことで時間単短縮が図れるばか、救助隊や救助犬の怪我をするリスクも軽減できます。安全で効率的な捜索活動ができます。

②災害時の物資の運搬

災害後には物資の支援を避難所や買い物困難地域にスムーズに届ける必要があります。物資を届けるためには車やヘリコプターを通常使用します。しかし、道路が寸断していて、高価なヘリコプターではタイムパフォーマンスが低く、ドローンが必要となります。道路が寸断されていても、ヘリコプターの広い離着陸地帯がなくても運搬することができます。山にある民家にも容易に物資を届けることができます。

③災害発生後、迅速な防災マップ作成

どの区域が危険なのか、通行不可能なのかなどドローンを用いて調査を行い、災害発生後の状況把握ができます。そして3Dデータを元に作成したマップやドローンによる上空からの監視をすることで、迅速に現状把握を行い、情報を伝えることで、地域住民の安全及び危険区域の共有、さらには救出と間断なく実施することができます。

本選までの経緯

私たちがこのコンクールに参加した経緯は2つあります。

ひとつ目は毎年、高松ゼミは2年生が主体でこのコンクールに参加しています。今回もこのコンクールに参加して、私たちのゼミ活動の一端を説明出来たらと思いました。

ふたつ目は、私たちのゼミで行なっているドローンの利点について知ってもらいたいと思ったことです。ドローンは聞いたことあるけど、利点ってどんなことがあるの？なお、災害時をベースに考えることでストレートに表現することができると考えました。

調査・研究する中で私たちは、ドローンの理活動について、ドローンの利点をもっと発信する必要があることを痛感しました。私たちの確信はドローンを普段使いすることで、いつくるかわからない災害に対処することの重要性を知ることになりました。災害時の被害を小さくしたいという思いが発想の基底部にあります。

災害事態を事前に防ぐことが難しいですが、災害後の対処によって、多くの命を助けることがドローンによって可能です。ドローンには、まだ沢山の可能性を秘めており、その可能性は無限大です。その特徴を多くの人に知っていただきたいと思い、このコンクールに参加しました。共感を持っていただいた人が増えることを願っています。

（文責：経営学科2年　豊岡惟日）

指導教員（高松先生）からのコメント

ドローンは2022年12月に免許制度が始まりました。いよいよ本格始動する時期を迎えました。この意味では2023年度は「ドローン元年」と呼ぶことができます。ドローンに対する社会的認知度も徐々に上がることは間違いないと思います。

ゼミでは、地域活性化の活動をかれこれ20年近く行ってきました。様々な地域で実施し、活性化が成功した地域もあれば、そうでもない地域もありいろいろです。その地域で活動して地域住民と交流し、地域社会から多くを学ぶことができました。ゼミでは、地域から学び、地域に返していくというミッションを掲げ、お世話になった人への感謝の気持ちを大切にしてまいりました。こうした繋がりを大切にできる一人ひとりでありたいと願って活動しています。

ドローンを普段使いのように操作する技術を磨き、地域のニーズに応えていきたいと考えています。

高齢化・少子化を目の当たりにした地域では、我々のように地域ニーズに合致した道具をもって地域活動している取り組みはみられません。様々な分野に拡大するドローン利用ができる人材を育てたいと考えています。

プレゼンテーション・コンテスト　ベストプレゼンター

リベンジ成功

木原ゼミ　国際環境経済学科３年　COLAK CIGDEM（チョーラク・チィグデム）

今年のプレゼンテーション・コンテストにおいて、ベストプレゼンター賞を受賞できたことは非常に嬉しく思う。また、私たちに協力してくれた日本語教室の方々や外国人の生徒の方々、そして、私たちの研究が実りあるものになるよう、アドバイスを欠かさなかった木原先生にも大変感謝している。

昨年も本コンテストに出場し、英語でプレゼンを実施したが、思い通りの結果にならずに悔いが残っていたため、今年はリベンジしたい思いでいっぱいだった。テーマを探す段階で、自分が直面してきた問題を提示したら、他のメンバーは快く受け入れてくれて、一緒に調べたり、考えたりしてくれた。その甲斐もあり、今年こそ最優秀賞を取ろうと思いながら、努力した。グループの発表を優先しつつ、去年から欲しかったベストプレゼンターに選ばれるよう、発表の仕方やジェスチャー、話し方のメリハリ等を練習した。発表の後、木原先生に褒められることもでき、頑張ってよかったと思った。私は外国人であるため、どうしても日本人ほどうまく日本語を話したり、考えを伝えたりすることはできないが、今回のベストプレゼンター賞の受賞を通して、自分にできる最大限の努力をすれば、報われることを実感した。今回の、プレゼンテーション・コンテストで学んだことを活かして、これからの大学生生活や社会人生活を豊かなものにできるよう、努力していこうと思う。

プレゼンテーション・コンテスト　ベストプレゼンター

悔しさを糧に

木原ゼミ　国際環境経済学科３年　小束恵生奈

今回、ありがたいことに、多くのプレゼンターがいる中、ベストプレゼンター賞に私を選んでいただきました。正直な気持ちをいうと、プレコンから1ヶ月経った今でも、選ばれた時の嬉しさが残っています。ただ、驚きもプラスでのこっています。 今年プレコンに挑戦したきっかけとしては、木原ゼミの方にも書かせていただいたのですが、去年、木原ゼミを代表してプレコンの本選に出場していたからです。そのこともあって、自分の中ではプレコンをやるというのが当たり前の流れになっていました。正直、今年は本選に出場出来るか、ものすごく不安でしたが、見事に書類審査を突破して、本選に出場できました。 昨年を思い出してみると、前回のプレコンでは、自分の思うようなプレゼンが全く出来ませんでした。元々、私は昔から人前で話すことは得意だったため、プレゼンを舐めていた自分がどこかにあったと思います。しかし、実際に本番を迎えてみて、練習不足ということに気づかされました。そのため、アイデア賞をいただけたものの、プレゼンにおいては悔いがとても残っていました。 それから1年。今回はアイデアやパワポだけでなく、本番でのプレゼンも大事にすることを目標に取り組んでいました。台本作る時も、どうやったら相手の心を動かせるかを意識していたくらいです。日々のプレゼン練習はもちろんのこと、他にも自分なりにプレゼンが上手くなる方法をインターネットで調べたり、隙間時間に上手い人の動画も見たりして、研究していました。また、プレコン直前の数日間は寝る前にイメトレを行っていました。 その甲斐あってか、今回ベストプレゼンター賞を受賞することが出来ました。選んでいただいた審査員の皆さん、本当にありがとうございました。

ゼミ活動報告
高安ゼミ

高安ゼミ 2022年活動一覧

経済学科教授　高安 健一

学内外の多くの方々に支えられて、2022年のゼミ活動を無事に終えることができました。コロナ渦で新たな可能性を模索した1年でした。社会的課題の解決に微力ながらも寄与できたと考えます。活動の詳細はゼミのフェイスブックをご覧ください。
(https://www.facebook.com/takayasuseminar2017/)

《学内外での活動》

- **2月4日:「福島県白河市まちラボ学生プロジェクト支援事業最終報告会実施」**
  「白河Re: PGチーム」五味淵侑、舘野朋樹、煤田翼、鈴木知穂、根岸来凪、水野奏、石塚菜夕
- **2月7日:歓送迎会・卒業研究論文集授与(卒業生20人、新2年生19人)**
- **2月26日:草加市危機管理課「防災講座」**
  講師「災害と共生2020チーム」岩城来弥、石井瑞歩、鎌倉亜美、岡島大樹、山崎真優
- **3月8日:ジョイセフ・ホワイトリボンフェス**
  (参加見送り)
- **3月:2年生春合宿中止**
- **3月20日:卒業式挙行(二部制)**
- **9月3日:OB・OG会(オンライン開催)**
- **9月13-16日:茨城県鉾田市ホテルさわやにて夏合宿**
  2年生、3年生、4年生計45名参加
- **10月1-2日:グローバルフェスタJAPAN2021**
  (2年生オンライン取材)
- **11月4-5日:雄飛祭「国際開発シンポジウム開催 with ジョイセフ」、3年生プロジェクト報告会開催、模擬店**
  寄付へのご協力有り難うございました。
- **11月9-14日:草加マルイ1Fイベントスペース出店**
  「草加本染LOVERS」長澤優、内藤俊介、野中康成、大西達也、佐藤茉央、富山想
- **12月3・4・10・11日:東武動物公園にて「スタンプラリーでまなぶ!どうぶつたちの世界」開催。**
  「SDGzooチーム」中尾祐、千田晴南、中尾太飛、宮本初美、横山羅奈+ゼミ生多数
- **12月7-9日:「エコプロ2021」出展** 草加本染LOVERS
- **12月15日:埼玉県立草加かがやき特別支援学校にてSDGs関連授業**
  「獨協大生×草加せんべい×SDGsチーム」岡島直樹、櫻田真吾、酒井真里音、飯塚大晟、水野郁吹

《メディア・冊子製作等》

【11期生(卒業生):災害と共生2020チーム】

・3月8日:J:COM「LIVEニュース」出演
・3月15日:『東武よみうり新聞』「防災講座を動画配信　草加獨協大生、外国人に説明」

【12期生(4年生):多様性野菜レスキュー隊】

・9月24日:テレビ朝日「未来クリエーター」「多様性野菜レスキュー隊」(インフォマーシャル)城戸梨帆、鈴木結、君塚愛友、長谷川そら、大森史菜
・9月26日:『Forbes』日本語版ウェブサイト「サステナブルな社会実現に向けて、食のあり方を問う。『多様性野菜』の活用を通じて世の中に気づきを与える取り組み」
・11月11日:TBS news23にて活動紹介

【13期生(3年生)】

■草加本染LOVERS

・11月5日:リーフレット「草加本染の未来〜伝統を日常生活に〜」完成
・11月7日:『東武よみうり新聞』「獨協大生が『注染』商品 草加手拭い、ハンカチなど販売」

ゼミ活動報告
高安ゼミ

高安ゼミ 2022年活動一覧

経済学科教授　高安 健一

・11月9日：『日本経済新聞』「染色加工の手ぬぐいなど―独協大　ゆかたの伝統手法用いる」
・11月11日：草加市ウェブサイト「獨協大生が市伝統産業の染色技法で作ったオリジナル製品を草加マルイで出店中」
・11月11日：『地域新聞』「わたしたちにできることってなんだろう『若者×伝統』草加本染LOVERS」
・12月2日：『未来へ続く草加本染－持続可能な伝統産業への挑戦－』（36頁）発行

■ユースヘルスまもり隊

吉岡葵唯、米良一真、山田明日香、佐藤里歩、三輪李佳
・11月4日：『ユースクリニックへのとびら―性から考えるこころとからだ』（34頁）発行
・11月5日：NHKニュース7にて活動紹介「性に関する正しい知識や人権意識を 大学生が自主的に学び啓発」

■SDGzooチーム

・11月28日：東武動物公園によるイベント情報リリース「SDGsスタンプラリーで学ぶ！ どうぶつたちのせかい」
・12月1日：『SDGzooプロジェクト　スタンプラリーでまなぶ！ どうぶつたちのせかい in 東武動物公園』（30頁）発行
・12月3日・4日・10日・11日：東武動物公園にて生物多様性・絶滅危惧種の小学生対象スタンプラリー開催
・12月5日：NHK首都圏ネットワーク「おかえり天気」のコーナーに構内より生出演

ゼミ活動報告
山森ゼミ

山森ゼミ2022年度活動報告

経済学科准教授　山森 哲雄

山森ゼミでは、演習Ⅰ･Ⅱにおいて行動経済学の基礎的な知識を習得するとともに、2･3年生はグループ研究、4年生は卒業研究を通じて習得した知識を実践します。今年度のグループ研究は、全グループが「第68回日本学生経済ゼミナール大会」に、Aグループが「第10回 経済学部プレゼンテーション･コンテスト」に出場しました。また、3年ぶりにゼミ合宿を開催するとともに、新しい試みとして、ゼミ生の親睦と体力向上を目的にスポーツ大会を開催しました。それぞれの活動についてゼミ長の平田昇輝が報告します。

スポーツ大会

草加市市内の体育館を1日借りて、ドッジボール、バレーボール、バスケットボールの3競技を行いました。経験がない競技に対しても皆が積極的に参加し、学年を越えての交流の場、そして日頃の研究活動を忘れてリフレッシュする場にすることができました。初めて開催したイベントでしたが、半数以上のゼミ生が参加し、参加者からも好評だったため、来年度も引き続き開催を予定しています。

ゼミ合宿

ゼミ合宿は9月に静岡県伊東市で行いました。1日目は2･3年生のグループ研究の中間報告会を行い、各グループにおける研究の方向性について、ゼミ生全員で話し合いました。先生や4年生から指摘を受けることで、各グループが今後取り組むべき課題を明らかにすることができました。夕食後は、近隣の浜辺で花火を行った後、2･3年生は2度目の報告に向けたスライドの修正、4年生は翌日に控える報告の準備に励みました。2日目はグループ研究の再報告に加え、卒業研究の中間報告会を行いました。4年生のほとんどは1人で研究を行っており、第3者の意見を得る機会は限られています。この報告会で他のゼミ生から意見を聞けたことで、自分1人では気づかない問題点を発見することができたようです。また、2･3年生も自分たちの研究報告を上回る質の高い報告を4年生が行っているのを見て、刺激を受けているようでした。夜にはホテルの大宴会場にてコンパを行いました。2年生がビンゴ大会を企画し、夜遅くまで大盛況でした。3日目は伊東市周辺を観光しました。2日目まで研究を頑張ってきた分、旅行を存分に満喫することができました。

第68回日本学生経済ゼミナール大会

毎年度、山森ゼミではグループ研究の成果を学外のプレゼンテーション大会で報告しています。今年度は10月23日に開催された第68回日本学生経済ゼミナール大会に全4グループが以下の報告テーマで出場しました。

(A)増渕･平田･倪「過激な罰行動の内発的動機」
(B)神山･茂木･五十嵐･新里･山越「動物保護施設からの引き取り数増加に向けて ～コンジョイント分析による検証～」
(C)水嶋･加島･神原･水落･高田「包括的性教育の有効性」
(D)大和久･古川･鈴木･松原「同調圧力によるマスク着用者の割合」

経済学部プレゼンテーション･コンテストに出場するAグループ以外にとって、本大会は人前で研究を発表する最後の機会となります。各グループで、どうすれば自分たちの研究を審査員にうまく伝えられるかを必死に考えて発表資料を作成し、発表に臨みました。その結果、分科会でCグループが優秀賞、Aグループが3位入賞を果たすことができました。当日はグループ同士で励まし合い、健闘を称えあう様子がみられ、研究の集大成となるこの大会を全員で乗り切ることができたと実感しました。

第10回 経済学部プレゼンテーション･コンテスト

11月16日に学内で開催された第10回経済学部プレゼンテーション･コンテストにAグループが出場し、優秀賞を受賞しました。大会に向けて準備をしていくなかで、他のグループの人達が発表資料の作成を手伝ってくれたり、プレゼンテーションの練習に付き合ってくれたりしました。当日も多くのゼミ生が会場で応援してくれました。ゼミ生全体で力を合わせて取り組むことができた大会だったと思います。私たちAグループのメンバーも、周囲からの期待を背負うなかで結果を残すことができ、大きな達成感を感じることができました。

今年度は忙しくも楽しい1年を送ることができました。来年度も研究に励むことはもちろんですが、息抜きとなる企画を取り入れることで、メリハリのある1年にしていきたいです。

（文責：経営学科3年　平田昇輝）

ゼミ活動報告
湯川ゼミ

2022年度・湯川ゼミ活動報告（判例・裁判例の経済分析）

経済学科教授　湯川 益英

コロナ禍のため、ここ2年間簡略化した形でしか行うことができなかった模擬裁判を、今年度は本格的に再開することができました。

例年、模擬裁判では、すでに確立した判例や、AI、インターネット社会、電子マネー、知的財産など未だ判断が揺れている新しい法律問題をあつかってきましたが、今年度は、判例・裁判例の経済分析という観点から、ロースクールの教え子の弁護士たちのご協力を得つつ、不動産賃貸借と労働問題を取り上げました。（湯川）

借地借家法制の経済分析

定期借地権・借家権の導入を契機に展開された、不動産賃貸借の解約制限（=貸主による賃貸借契約の更新拒絶の際の「正当事由」の必要性）をめぐる論争をマテリアルスにして、経済学的見地から、判例・裁判例の分析と、想定事例について模擬裁判を行いました。

継続的債権関係の特質に着目して必要性を認めるグループと、不動産市場の健全化・経済効率性・社会法としての借地借家法の歴史的な役割の終焉などを論拠にして、現代社会においては不要とするグループとに分かれて、活発な攻撃・防御が展開されました。（谷口佳太）

労働法制の経済分析

労働の対償として支払われる賃金で生活を営む労働者は、労働力商品の性質から、使用者に対して地位が低くなりやすく、平等な契約を結ぶためには、労働者の地位の保護は必要不可欠です。

その点、解雇規制は欠かせないものですが、現在の解雇規制は厳格にすぎるという見地があります。すなわち、現在の解雇規制は、使用者に不自由を強いているだけでなく、雇用市場を停滞させ、経済発展を阻んでいることが大きな問題点とされています。

模擬裁判では、想定ケイスをめぐって、解雇規制の緩和および解雇の金銭解決制度の導入を模索するグループと、使用者と被用者との間に様々な格差があることや、金銭解決制度を導入するにあたり人権の視点が欠けていることを理由に、これに反論するグループとの間で有意義な議論が戦わされました。（関　千鶴）

ゼミ活動報告
有吉ゼミ

時を超え、世代を繋ぐバトン
～大久保ゼミと有吉ゼミの連携

経営学科教授　有吉 秀樹

本学で2005年度までマーケティング論を担当されていた大久保貞義先生が2019年1月にご逝去されました。34期生まで続いた大久保ゼミ。「縦の繋がり」を大切にされた大久保先生は、歴代の卒業生が集う連合同窓会を中心に数々のイベントで皆が繋がっていくことを大変誇りに思っておられました。退職して新しいゼミ生が増えなくなった後も、ご自身が創設された経済学部生向け奨学金の受給者を同窓会に迎え入れるなど、常にOBOG組織に若い力と新しい風を吹き込む努力をされているのが印象的でした。そのような中、突然訪れた先生のご逝去の報。どのように心の中で受け止めていけばいいか十分整理がつかない中で、さらに追い打ちをかけるように襲ってきたコロナ禍。今後のゼミの在り方をいかにすべきか、小栗宣裕会長をはじめとするOBOG会の皆さまが模索される中で始まったのが、大久保先生の後任として2006年から着任した有吉秀樹先生との交流の動きでした。

マーケティングという同じ専門領域とはいえども、大久保ゼミと有吉ゼミでは先生のキャラクターも細部のゼミ内容も異なります。しかし、社会へ巣立った後に活きてくる素養を身につける姿勢や縦のつながりを大切にする意識など共通する部分は多く、有吉先生も大久保ゼミからの要請に惜しみなく応えたいと思われました。考えてみれば、両ゼミは以前からご縁があり、有吉ゼミ11期生の関根優子さんが前述の大久保先生の奨学金受給者となり、大久保ゼミ卒業生の一員にもなっています。まず、大久保先生の誕生日に合わせて2019年6月に開催された「先生を偲ぶ会」に有吉先生と関根さんが出席。コロナ禍を挟んで2022年6月に開催された連合同窓会には、有吉先生の他、4年生の椎木慧仁さん（有吉ゼミ16期生）、3年生の金村亜美さん（有吉ゼミ17期生）が参加しました。また逆に、2023年2月の有吉ゼミ19期生を迎える合宿では、大久保ゼミ33期生の村上翔さんが課題を持ってきてくださり、皆で学習しました。大久保ゼミにとっては未来に続く若い力を、有吉ゼミにとってはこれまでのOBOGにはない壮年期の経験者を数多く得ることにつながります。それぞれに大きなプラスをもたらし、大久保先生のご遺志にも沿うような連携をこれからも続けていきたいと思います。

（文責：国際環境経済学科4年　椎木 慧仁）

水たき 玄海で開催された大久保先生を偲ぶ会（2019年6月）。大久保先生の遺影と有吉先生を囲んで

有吉ゼミ現役生の椎木さん、金村さんと共に大久保ゼミOBOGが集結（2022年6月）

ゼミ合宿では、村上翔さん（大久保ゼミ33期生・写真左端）が持ってきてくださった課題を、世代を超えて議論した（2023年2月）

【寄稿】「大学での学びによる成長は、社会の仕組みを学び、技術を身につけること」――大久保先生の教えを受け継ぐために

大久保貞義先生のゼミは、第1期（S49卒）～第34期（H19卒）まで約580名の卒業生がおり、様々な分野で活躍しています。大久保先生は、「大学での学びによる成長は大学にあるのではなく、社会に出てから社会の仕組みを学び、技術を自ら身につけることである」とご指導くださり、卒業生の繋がりを大事にされていました。私たちは、その遺志を受け継ぎ、『大久保ゼミ同窓会』として学年を越えた深い絆を築いてきました。大久保先生が残してくださったこの財産をさらに発展させるため、有吉先生に現役生との交流を相談したところ、快いご返事をいただきました。大変感謝しております。今後どのようなコラボができるのか楽しみです。よろしくお願いいたします。

大久保ゼミ20期（平成6年3月卒）　小栗宣裕

ゼミ活動報告
堀江ゼミ

2022年度 堀江ゼミ活動報告

経営学科教授　堀江 郁美

2022年度は必修で学校に来ている2年生は対面で、3年生以上はハイブリッドでゼミを実施しました。対面も復活し、今年度も趣味全開で楽しみながら研究活動をしています。2年生は興味のあるものに触れる、をテーマに、任天堂ワールドを3Dで作ったり（図1）、春日語ジェネレータアプリやシューティングゲームを作成したりしました。3年生はバーチャルYouTuberを雄飛祭に出展させたり、メタバースでコミュニケーションの場を作成（図2）しプレコンでアイデア賞を受賞したりしました。4年生は昨年プレコンで最優秀賞を頂いたd-salon（図3, https://d-salon.jp/）を発展させ、基本的なゼミや授業の情報やチャットだけでなく、グルメ情報や教科書の譲渡機能なども追加しました。コロナ禍でも学生たちが有意義に学生生活を送れる様に研究を続けており、年度末には学会で発表予定です。

図1. 任天堂ワールドを3Dで作成

図2. 3Dコミュニケーションの場「rootour」

雄飛祭　出展報告　　**3年　清水優貴**

今回、雄飛祭にバーチャルYouTuber（以下VTuber）の出展をした（図4、図5）。VTuberは近年若者を中心に爆発的な人気を博しているコンテンツであり、その勢いは今も増している。アイドルやゲーム実況者のような立ち振る舞いをする彼らだが、実際は高度な専門技術によって支えられている。特に3Dモデルを利用したVTuberは「モーションキャプチャー」と呼ばれる機材を使っており、これによって新たな自分、つまりバーチャルでの自分が動かせるようになる。SNSでこのコンテンツを知った際に「自分も動かしてみたい」と思うようになったのをきっかけとし、ゼミ内をはじめ、多くの方の協力を得ながら3Dモデルを動かそうと活動してきた。

我々の活動は失敗の連続だった。原因不明のエラーや3Dモデルのバグなど、これまで体験したことのない困難に遭遇した。だが、そうした中でも根気よく取り組み、無事に出展することができた。この経験は自分にとって非常に意義のあるものとなった。この成果を一過性のものとするのではなく、これからのゼミ活動や卒業研究に繋げながら、ご協力していただいた全ての方に還元できるように努めていきたい。

図3. d-salon（https://d-salon.jp）

今回の雄飛祭の開催にあたり、堀江先生をはじめとしたゼミ生、並びにモーションキャプチャーを貸してくださった埼玉県立進修館高校の島田先生、3Dモデルの使用許可をくださった株式会社クリエイトリング様、来場していただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

図4. 雄飛祭ポスター

図5. 雄飛祭での風景

ゼミ活動報告
李　ゼ　ミ

2022年度　李ゼミ活動報告

経営学科准教授　李 凱

新型コロナウイルスの影響により、2年ぶりに対面でゼミ活動しました。今年の演習1では、GIMPを利用した静止画処理、動画撮影･編集を勉強しました。二つにグループを分け、各自のテーマを設定し、動画の撮影、編集を行いました。演習2では、LeetCodeを使い、海外GAFAMなど有名IT企業の人事採用流行っているCoding Interview質問集を一緒に勉強しました。Pythonの基礎をはじめ、Tree,Sort,Graph,BFS,DFSなどの問題を実践的にプログラミングとアルゴリズムの知識を勉強しました。文系の学生にとって、ちょっと難しいかもしれませんが、ゼミ生が自分で問題を選定し、解決方法を説明できたことに安心しました。他の授業で学んだ基礎と理論知識をゼミで実践的に深掘りできることがこのゼミの特徴と言えます。

●夏合宿

今年の夏合宿は学内で演習1、2、3の合同ゼミを行いました。内容は雄飛祭に出展準備のため、メディア･アートのコンテンツ作成とプロジェクションマッピングについて一緒に勉強しました。4台のプロジェクターを使い、ウルトラワイドの画面を構成し、またモーションセンサーと連動したインタラクティブなデジタルアートの作成方法を一緒に勉強しました。

●雄飛祭に出展

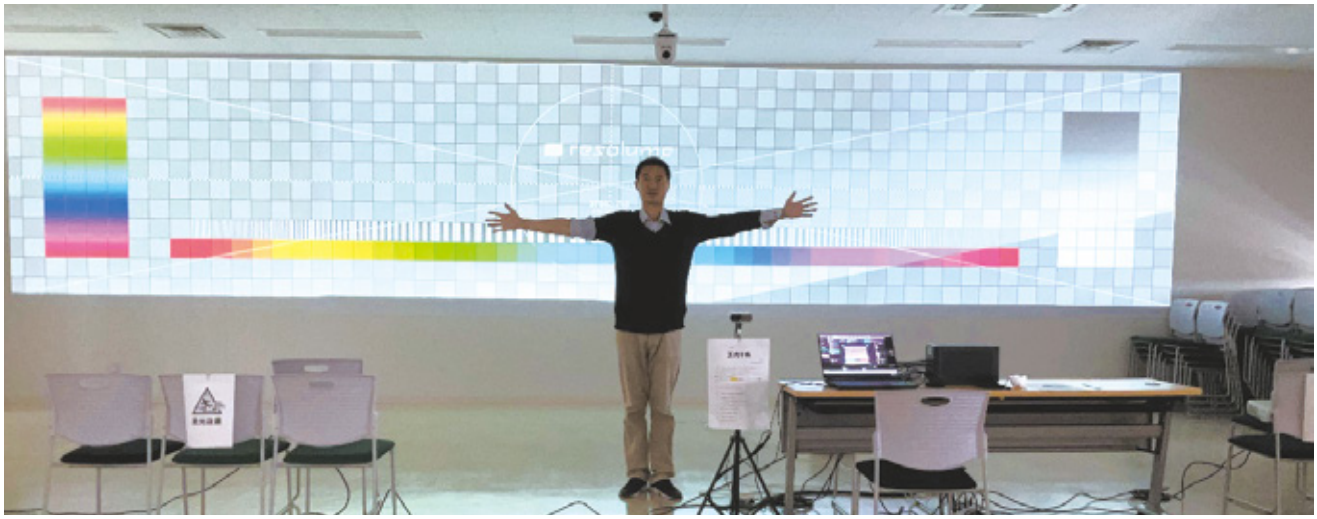
11月3、4日の雄飛祭に、李ゼミがAudio Feedback,Far Out, 3D Dancing Girl,Fluid Simulationなど7個メディア･アート作品を出展しました。作品はコンピュータプログラムによってリアルタイムに描かれ続けています。あらかじめ記録された映像を再生しているわけではありません。光、影、音、色などアートの空間が、時間を通して変化し、また人々の動きの影響を受けながら、変化し続けます。来場者が目と耳で感じながら、体(右手)を動かしてメディア･アートを楽しんでいただきました。初日は104名、二日目は227名が来場いただきました。

(文責:李凱)

●演習1の動画撮影･編集

秋学期では主にダビンチリゾルブを活用した動画編集を中心に学習しており、本格的な4Kカメラやジンバルを用いた撮影なども体験することができました。基本的なカットペーストといった基本操作に加えて後からズームの様に見せる編集など特殊で複雑なエフェクトにも挑戦し重いジンバルなどを持つ体験からはYouTuberやテレビ局のカメラマンの苦労が垣間見えましたがそこも含め、仲間と楽しく学べたと思います。

(文責:国際環境経済学科2年　小林秀馬)



雄飛祭に出展したMedia Artのウルトラワイド･プロジェクション･マッピング画面

ゼミ活動報告
松枝ゼミ

2022年度　松枝ゼミ活動報告

国際環境経済学科教授　松枝 秀和

1）環境教育活動ー和洋国府台女子中学の出前授業の報告

私たちは、ゼミで習得してきた「環境教育」に関する資源や最新の知識を活かして、「持続可能なまちづくり」の基盤となる環境学習プログラムの構築と、その実践活動を通して子供達に「気候・環境・自然」の大切さや最新の情報を伝える活動を行ってきました。

11月18日（金）、和洋国府台女子中学校（対象：中学3年生計108人）にて、国立環境研究所の気候変動適応センターと研究協力を結び、気候変動への「適応」をテーマにプレゼンテーション「適応策ってなあに」と、学習ツール「気候変動適応のミステリー」を用いたワークショップを実施しました。現在は教育効果の解析と事後アンケートの分析を行っており、また2月には同中学ですすごろく「気候変動適応への道」を使用したワークショップを行いました。今年度は適応策の環境教育を主要なテーマとして進めてきましたが、今後はさらに提供できるコンテンツを増やしながら、実践教育に展開していきたいと考えています。　（文責：国際環境経済学科3年　山田萌）

和洋国府台女子中学校にて

2）水質調査活動ー伝右川と中川の調査と分析概要

私たちは国際環境経済学科特任教授の濱先生のご指導を仰ぎ、伝右川の週1回の定期観測を中心に、夏休みには中川に出かけて埼玉県の河川の水質調査と分析を行っています。この調査の目的は、化学的環境と生物相との関係を明らかにすることです。調査項目は多岐にわたりますが、大きく①一般的水質、②生物相、③有機物に分かれます。一般的水質には、DO（溶存酸素）、pH、電気伝導度、栄養塩類（窒素・リン）、CODなどを対象にしています。また、生物相には植物プランクトンの顕微鏡観察と色素（クロロフィル）の分析や、バクテリアの蛍光染色による個体数の計数が主な項目です。有機物については、懸濁態有機炭素と窒素や同位体比、溶存態有機炭素が挙げられます。これら全てを獨協大学で測定できないため、筑波大学の大森先生の研究室をお借りして分析させて頂いています。今後もチームのメンバーと協力して継続して調査を進め、身近な河川の環境変動の実態を調べていきたいと考えています。　（文責：経済学科3年　鈴木夕夏）

筑波大学での分析講習会の風景

3）合同学外研修活動ー訪問先と研修概要

秋学期中に計3回、2年生が中心となって研修を企画して実施し、ゼミのテーマである「気候と地球環境の科学」をより深めるため学生主体で行う学外研修を今学期から試みました。

東京国立博物館の見学では、国宝や重要文化財などの幅広い分野の作品の鑑賞を通して、日本の歴史や文化を新しい視点を持って鑑賞し、当時の人々が大切にしていた思いを肌で感じました。

国立科学博物館の訪問と明治神宮前銀杏並木の散策では、地球の成り立ちや日本国内の動物や植物の違いや種類の豊富さを見聞し、紅葉狩りで木々の衣替えの様子から、地球の多様性と四季の変化に触れることができました。銀杏並木の葉の綺麗な色付きとともに銀杏の香りから、秋の終わりを実感しました。

国立科学博物館附属自然園の散策企画は、地球環境の変化やライフスタイルの変化により、四季を感じる機会が減少していることが動機となりました。慌ただしい日常の中で、自然に親しみ、四季折々に変化する生物の姿や風景を堪能することができました。秋から冬への動植物の冬支度の様子に触れて、自然の尊さに安らぎを覚えた一時となりました。

（文責：国際環境経済学科3年　菜花千里）

東京国立博物館前にて

ゼミ活動報告

米山ゼミ

“持続可能な社会を創る”ためのコンテスト参加とプロジェクトの活動報告

国際環境経済学科教授　米山 昌幸

本ゼミは、「SDGs実践と持続可能な社会の創造」をテーマに揚げて、グローバル社会における持続可能な開発に関する問題を経済学的視点からアプローチするとともに、身近な問題として捉えてプロジェクトを設定し、問題解決に向けて実践的に行動するPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）に取り組んでいる。学生は専門知識を深めるとともに、社会にどう貢献できるか、社会をどのように変えていくことができるかを主体的に考えて能動的にプロジェクトに取り組み、コンテストやコンペにも積極的に挑戦している。2022年度にゼミで取り組んだコンペやプロジェクトの活動について、以下に報告させていただく。

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2022」において東北経済産業局長賞を受賞

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2022」（主催：内閣府、共催：経済産業省）において、日野原楓（代表：国際環境経済学科2年）、尾内文音（経営学科2年）、菅野琴音（国際環境経済学科2年）、島田隼人（同2年）、丹野悠太（同2年）、緒方梨七（同2年）、田浦駿介（同2年）、谷津梨奈（同2年）、吉田華（経営学科2年）の9名からなる米山ゼミ復興知メンバーが、福島県田村市を対象地域に「再エネ推進による脱炭素社会の実現で田村市の地域経済を元気に!」という企画提案を行い、地方第二次審査にて「東北経済産業局長賞」を受賞した。

本コンテストは、内閣府が運営する地域経済分析システムRESASを活用し、ある地域を元気にするような政策アイデアを募集するコンテストである。同チームは、少子高齢化や田村市の地域経済循環率が低いという課題を解決するべく、田村市内で再生可能エネルギーの普及を行い、エネルギーの地産地消による地域活性化を目指す解決策を提案した。

2年目となる「大学生等による『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」において、本学が田村市で展開している「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」の中心テーマである「脱炭素社会の実現、再生可能エネルギー100%を目指した持続可能なまちづくり」に関して、米山ゼミ復興知メンバーが企画提案をまとめた。審査員の方からは、「田村市の問題に対して再エネの導入の視点が良かった」「裏付けがあり、実現性が高い」などのコメントをいただいた。また、「さらに具体的な数値やデータを示せるとさらに良い」というコメントもいただき、本提案実現に向けて今後も取り組んでいきたい。

第50回2022学生懸賞論文入選

第50回2022年獨協大学学生懸賞論文では2編の論文が入賞を果たした。吉田華（経営学科2年）「双葉町の再生まちづくりに必要な交流の場・コミュニティの創出」が優秀賞を受賞した。地震・津波・原子力発電所の事故というさまざまな被害があった東日本大地震から11年以上経った2022年8月30日に、ようやく避難指示が解除されて町内に役場の機能が戻り、もう一度人が住めるようになった町、福島県双葉町をテーマに取り上げた。被害によって、復興への足止めを食らい、長い年月にわたって住民ゼロだった双葉町にとって重要な年である。双葉町出身である筆者は震災後に何度か足を運んでいたが、今年9月には隣町も含めた現地調査を行った。新しい建物と崩れたままの建物があり、復興はこれからである。本稿では双葉町の現状や隣接する町の取り組みについて触れて、復興まちづくりに対する課題をいくつか洗い出した。その中でもコミュニティや町に残る校舎に着目し、復興まちづくりにおける今後の在り方について述べた。独自性や現地調査の充実性、図表の効果的な用い方などが評価されたが、先行研究や考察の不十分さが残ったため、今後に生かしていきたい。

また、丹野悠太（国際環境経済学科2年）「石巻市における災害復興公営住宅のあり方～神戸市の取り組みと比較して～」が審査員奨励賞を受賞した。本稿は東日本大震災の被害を受けた宮城県石巻市を題材にした。石巻市斎藤正美石巻市長は「住まいの再建を優先的に進めた。」「復興事業の9割が完成していて、あと一歩である。」と述べている。しかし、コミュニティの形成というものが疎かになっていることが分かった。そして災害復興公営住宅の仕組みがその原因であることを明らかにした。1995（平成7）年1月17日に発生した阪神・淡路大震災による被害を受けた神戸市でも同様の課題が上げられていた。根本的な原因の災害復興公営住宅の抽選方式のしくみを改善し、「被災者のニーズにあわせる」という点の重要性を指摘した。審査員の方からは「神戸市における事例が詰められていない」という指摘があり、今後、神戸市の事例を含め全体的にさらに詰めた提案にしていきたい。

コンテスト参加報告

ムハマド・ユヌス博士が提唱するソーシャル・ビジネスを競う「YYコンテスト2022」には、「途上国における貧困撲滅のための支援プロジェクト」、「消費者行動改善プロジェクト」、「地域活性化プロジェクト」、「LGBTQ+プロジェクト」の4チームがエントリー審査を通過し、4回にわたるワークショップに参加した。メンターの指導をもとにブラッシュアップを行い、本選に出場したが、グランドチャンピオン大会には進めなかった。「消費者行動改善プロジェクト」は、実際に当事者の方へ衣服購入する際に感じる障壁を調査し、アパレルブランドのオンラインサイトに音声機能を付けたチャットボットを導入するという提案を行った。「地域活性化プロジェクト」は、2020年3月に避難指示が解除された福島県双葉町の再生をテーマとして、実際に現地調査を行い、東京、双葉間に開通したバスと双葉アートを組み合わせた復興アートバスツアーの提案を行った。「LGBTQ+プロジェクト」はLGBTQ+当事者の抱える生きづらさの原因を調査し、オンラインコミュニティを活用したLGBTQ+当事者向けのWEBメディアを提案した。

これ以外にゼミを挙げて取り組んだコンテストとしては、「経済学部プレゼンテーション・コンテスト」にはゼミから4チームがエントリーし、「食と農を考えようプロジェクト」が本選に出場し、最優秀賞を受賞することができた。また、このプレコン最優秀賞受賞提案に関して、「地球温暖化防止プロジェクト」は、脱炭素チャレンジカップ事務局（地球温暖化防止全国ネット）が主催する「脱炭素チャレンジカップ2022」のアイデア賞へエントリーした。

また、「守り残したい未来、創りたい未来」をテーマに、未来の地球について、想い・夢・体験・活動・アイデアなど、3分動画を募集するGreen Blue Education Forum実行委員会主催「GBEFコンクール」には、ゼミから11組が応募した。

プロジェクト活動報告

「食と農を考えようプロジェクト」は、6月と12月の“Earth Week Dokkyo”で「草加の野菜を食べよう!〜ピザ窯で作るピッツァ〜」を開催した。このイベントでは草加産の野菜に関心を持ってもらい地産地消を推進することを目的として、レンガを積んで作った窯でピザを焼き、学生に配布した。前日のピザ窯づくりや当日のピザの仕込みなどでは大竹ゼミ、大坪ゼミにも協力してもらった。この企画では、新鮮な草加の野菜の美味しさを参加者にPRすることができた。今後も地産地消につながる活動をしていきたいと考えている。

12月16日に行ったピザ窯イベント

「地球温暖化防止プロジェクト」は、“Earth Week Dokkyo 2022〜Summer〜”のプレイベントとして5月に学内で学生や教職員にゴーヤの苗を配布し、ゴーヤのカーテンの設置を呼び掛けた。CLEASにゴーヤのカーテンを設置し、ゴーヤ収穫祭にてゴーヤカレーも作った。また、“Earth Week Dokkyo 2022のSummerとWinterにおいて施設事業課と共催で西棟の「省エネ・創エネ設備見学ツアー」や「ライトダウン」「公開省エネ推進会議」を開催した。ライトダウンでは昼休みの教室の電気を消して回り、廊下などの共用部は自動点灯が消灯された。そして省エネ推進会議にてライトダウンを行った結果をCO_2排出量に換算して約8t-CO_2のCO_2を削減できることがわかった。12月からはこのライトダウン活動を毎日行っており、省エネに取り組んでいる。

また、今年は「第4回SDGsエコフォーラムin埼玉」の学生コアメンバーとして参加し5回の打ち合わせを経て、若者が主体となる脱炭素ライフスタイルワークショップの企画・運営を行った。ワークショップでは食品ロス、電気自動車、環境教育、エシカルファッションの4つのテーマごとに発表し、その後参加者を含めたディスカッションを行い、問題に対する理解を深めることができた。ゼミとしては35名の学生が5つの分科会にそれぞれ参加し、さまざまな分野から環境について考えることができた。

「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」は、埼玉県主催の春のプラごみゼロウィークで大学周辺の河川敷のゴミ拾いを実施し、ゴミの量の変化などを調査した。他にも草加パドラーズの協力のもと、川ガキ体験事業での子供カヌー体験会および生き物調査等の活動を行い周辺住民や近隣の子どもに対して川に親しみを持ってもらえる活動を行った。また「伝右川再生会議」にて伝右川プロジェクトチームが発表を行うにあたって、伝右川全域(約14km)を調査し汚染水の流入箇所を調査した。伝右川再生会議では多くのパネリストの方からアドバイスをもらうことができた。今後はいただいたアドバイスをもとに新たな提案の方向性を見出し、かつてのきれいな伝右川に戻すため、今後もゼミ活動を頑張りたい。

「脱炭素ライフスタイルワークショップ」企画運営会議

さいたま市立美園小学校チャレンジスクールにおける環境教育

10月22日、さいたま市立美園小学校「土曜はばたき教室」において、次世代を担う小学生にわかりやすく環境教育、SDGs教育を行った。「地球温暖化ってなんだろう?」をテーマに地球温暖化問題について簡潔に説明し、身近に問題意識を持ってもらえるよう電化製品でエネルギー消費が多いものを予想し、省エネについて考えるワークショップを行った。環境教育後に行ったアンケートによると「これから省エネ活動に取り組もうと思ったか」と言う質問に対し、36人中35人の児童が「そう思う」と答えた。環境教育は自分たちの学びを見直し、論文執筆やプレゼンコンテストへの取り組みを深めるきっかけとなる貴重な場となった。

美園小学校チャレンジスクールでの環境教育

徳永ゼミ

経済学科教授　徳永　潤二

2022年度の卒論テーマと概要（掲載は名簿順）

1 椎名　洪仁
消費税の存在、増税とプライマリーバランスの重要性：高齢化に伴う社会保障費用の増加

増加している社会保障の財源、国債返済における消費税は増税不可欠であるが最優先事項ではない。

2 名城　颯一郎
シンガポールと沖縄の比較から考える沖縄の経済発展

シンガポールと沖縄の共通点と相違点からシンガポールの経済発展の要因を考察し、沖縄の経済発展を考える。

3 寺島　楽翔
貯蓄から投資の理想と現実

貯蓄から投資の風潮の是非を問う。資産倍増や投資することへの考え方をマクロ的視点で考える。

4 安曇　幸寛
コロナ禍の IT の変化と今後の経済の動向

コロナ禍において経済は大きく変化した。本稿ではITと経済の関係、今後の動向について分析する。

5 菅野　朱音
第２次世界大戦後の変動相場制

第2次世界大戦後の変動相場制の問題点や解決策、今後の課題などを論文として作成。

6 後藤　颯太
増え続ける国債と日本の行方

国債の増加により若者への負担は増加している。国民に負担を感じさせない国債の増加を防ぐ政策を提案する。

7 髙橋　弘樹
少子化問題におけるベーシックインカム

少子化問題の現状の対策の問題点と、新たな対策としてのベーシックインカムの可能性を考察する。

8 三浦　寛太
イギリスの EU 脱退が世界に与える影響

世界的に大ニュースとなったイギリスのEU脱退が世界にどのような影響を与えたか、様々な観点から論じる。

9 石丸　雪乃
食料問題と私たちにできること

世界で起きている食料問題について調べます。そして今私たちに出来ることを考えます。

10 小針　義史
半導体からみるグローバル・バリューチェーン：世界経済はどう変化するか

グローバル･バリューチェーンが、世界各国の地位に対して、どのような変化を与えるかを考察している。

11 田谷　有紗
韓国における少子高齢化問題の実態と対策

韓国･日本の少子化対策を比較し、その対策によって経済が安定するのかを解き明かす。

12 丸山　京香
地方創生 SDGs と地域金融機関

金融機関はSDGsへの貢献を見える化し、取組みをステークホルダーに正しく理解してもらう必要がある。

湯川ゼミ

経済学科教授　湯川 益英

1 関　千鶴
解雇規制緩和にともなう解雇の金銭解決制度の提案および制度設計の検討

解雇規制の緩和および解雇の金銭解決制度の導入の提案を行い、日本で金銭解決制度を導入するための制度設計を行う。また、金銭解決制度を導入するにあたり、問題視されている人権の視点の欠如の原因となる要素を明らかにし、その解決方法についても検討する。

2 宮本　菜々
日本企業における長時間労働問題の解決に向けて―労働基準法改正による今後の期待

日本企業において問題視されている長時間労働問題について言及し、2023年から施行される法改正によって、日本企業の勤怠管理がどのように変化すると予測できるのかを明らかにする。

3 高橋　柚輝
自動運転に関する法的課題

東池袋自動車死傷事故を契機に、自動運転への待望から、実装までの法的問題点を調べた。

4 根本　海聖
死刑制度は存置すべきか廃止すべきか

世界的な廃止の状況の中、なぜ日本は死刑制度を存置しているのか疑問に思い、死刑制度は存置すべきか廃止すべきかについて考えた。

5 須藤　渉
大麻取締法の問題点

アジアの隣国では合法で、日本では社会復帰を困難にする懲役刑という違いから、現状の大麻取締法の問題点も踏まえつつ懲役刑という刑の重さについて改めて考える。

6 野澤　舞白
嫡出子と非嫡出子における相続

憲法における家族と個人の在り方について考え、非嫡出子法定相続分規定に対する違憲決定と対応した民法改正を検討する。

7 須藤　杏実
共犯における諸問題

共犯について、与えられる刑事罰や実行犯との相違を因果性の観点を踏まえて検討する。また、民法の視点から共同不法行為との関係にも言及する。

8 渡辺　智大
音楽著作権管理制度の課題と音楽ビジネスの今後

現在の音楽業界の現状を省み、日本の音楽ビジネスの改善について考える。

9 柳元　洸人
少年犯罪の背景と少年法の厳罰化

少年による犯罪の事例に基づいて、その背景と、少年法の厳罰化について検討する。

10 服部　輝
日本の食品ロスについて

「食品ロスの削減の推進に関する法律」を踏まえ、現状の問題とその解決に向けた取り組みなどを考察する。

11 高浦　謙太
日本における安楽死法の是非

日本の現行法と判例・海外の事例についても調べ、現行法のメリット・デメリットを考え、新たな立法について検討する。

12 只須　貞汰
LGBT（性的少数者）の婚姻の権利について

何故同性カップルが婚姻にこだわるのか、同性婚の今後について考えていく。

13 太田　祐希
海賊版サイトに関する著作権法の問題

過去と現在の海賊版サイトによる被害と手口を比較し、法律の改正による効果があったかを考える。

14 布施　尚暉
少年法厳罰化についての考察

少年犯罪の現状、改正法の内容と問題点を述べる。

15 松居　佑奈
SNS と法律問題

SNSによる誹謗中傷問題を法的観点から見つめ、あるべき法的措置について考察することにより、被害を最小限に抑えるための提案を行う。

16 竹内　志帆
知的財産権の保護
ーデジタル化による模倣物の流通被害ー

デジタル化にまつわる日本国内の著作権被害を中心に考察し、その法的な対策を検討し、一人ひとりの道徳・倫理、「侵害しない意識」も大切であると説く。

有吉ゼミ

経営学科教授　有吉 秀樹

今年度も有吉ゼミでは秀逸なテーマが揃った。特筆すべき2件について記述したい。

柳澤　佑
「経営者と宗教」

日本人の宗教に対するイメージはどうだろうか。多くの人が宗教を忌避するに違いない。昨今は統一教会を巡る事件もあり、宗教に対する見方はより一層厳しくなった。宗教と関係を持つ政治家や経営者を批判的に見る人もいるだろう。

今回、私は「経営者と宗教」をテーマとして選定した。両者は一見繋がりがないように見える。ところが、これまでのゼミ活動を通じ、宗教を信仰する経営者が多く存在することを知った。2年次に取り組んだヤマト運輸。その実質的な創業者である小倉昌男はクリスチャンであり、その信念の基礎にキリスト教の教えがあった。3年次に戦略を立案したホンダ。一見すると技術者集団のように思えるホンダにおいても、本田宗一郎や藤沢武夫のフィロソフィーを継承するにあたり、「宇宙万物の法則」といった宗教哲学にも通ずる視点を大事にしている。その他にも、クリスチャンでグンゼ創業者の波多野鶴吉や日蓮宗を厚く信仰した伊勢丹創業者の小菅丹治、宗教から経営哲学を生み出した京セラ創業者の稲盛和夫など例を挙げればきりがないほどだ。

論文では、これらの企業経営者の理念の形成に信仰が果たした役割を解きほぐしていきたい。特に、創業家としての使命と矜持を胸に経営を行う戸田建設副社長の戸田守道様より、「根源的に考えるという点では経営者も宗教家も共通している。」「『人生は思い通りにいかないもの』という釈迦の言葉に救われたこともあった」というお話をうかがったのは印象的である。また、学生時代に信仰に触れ、そこで培われた信念から「理念経営」を行うワタミ創業者の渡邉美樹様にインタビューを行えたことは研究の深化に多いに役立った。厚く御礼申し上げる。

戸田建設副社長 戸田守道様（前列右）にお話をうかがった（後列右から2人目が柳澤さん）

理念経営を掲げるワタミ創業者 渡邉美樹様（中央）へもインタビュー

椎木　慧仁
「家庭教育の復権」

「家庭教育」という言葉が廃れて久しい。戦後すぐに行われた民法典の改正は家制度に大幅な変革をもたらし、高度経済成長期に進行したサラリーマン世帯の増加は世代意識を薄れさせるもととなった。親世代が積極的に子供世代への教育にかかわる姿勢が弱まる一方、女性の社会進出や少子化などから子供1人にかけられる教育費が増大したことを背景に、子供の教育を学校や塾に外注する親は増加の一途を辿っている。本当にそれでいいのだろうか。ゼミ活動を通じて、数々の経営者を研究する中で、社会でどのように活躍するかは幼少期にどのような人格を形成したかと深く関係することがわかった。その人格形成において、何らかの意図を持って親の手を入れていく家庭教育が果たす役割は非常に大きい。今こそ家庭教育を再評価すべきではないだろうか。

研究を進める上で有吉教授のお力添えをいただき、全学共通カリキュラム講座『社会を生き抜くセルフブランディング』にお越しになったゲスト講師の方々に毎週お話をうかがってきた。「ご自身が受けてきた家庭教育をどう感じ、何を受け継ぎ、何を自らの代で変えていくのか」…この問いは簡単なようで実は非常に難しい。ご自身についてはしっかりとした人生観を持ち、キャリア形成につなげてきた方々でも、それを子供たちに伝えていくことに意識を向けられている方は必ずしも多くないことがわかった。卒論を通じて、家庭教育の復権を図る策を練っていきたい。

スイスと結んでのZOOMインタビューも実施（写真左はホンダのF1黄金期を牽引した後藤治様（現：Geo Tech代表）、写真中央が椎木さん）

米山ゼミ

国際環境経済学科教授　米山 昌幸

米山ゼミは、グローバル社会における持続可能な開発に関する問題を経済学的視点からアプローチするとともに、身近な問題として捉えてプロジェクトを設定し、問題解決に向けて実践的に行動するPBLに取り組んでいる。以下に今年度の卒業論文の概要を紹介する。

1 小山　健司
「過疎地域における買い物難民問題と移動販売の実現可能性の検証―福島県喜多方市を事例に―」

日本では多くの地域で過疎化が進んでいる。総務省によると過疎地域は全1,719市町村中、半数近くの817市町村となっており、面積にすると国土のおよそ6割を占めている。過疎地域における最も重要な問題は、コミュニティーが欠如してしまうことだと考える。そして、少子高齢化に伴い買い物難民が多く発生する。

そこで本稿では、買い物難民の増加という課題に対して、移動販売を用いることで解決を図りたいと考える。具体的には、筆者がこれまでの福島県「集落自主活動に係る伴走支援事業」で実際に現地活動を行った福島県喜多方市高郷町本村地区を事例に展開した。

2 髙野　伊織
「フィリピンにおける貧困の連鎖脱却に向けた学校給食導入の必要性」

フィリピンは現在経済成長期にあり、GDPは毎年約6%ずつ上昇している。経済発展につれて徐々に貧困も改善されつつあるが、まだ完璧であるとは言えず、2021年時点で約18%、約2000万人が貧困であるとみなされている。貧困であることで学校に通うことができず、大人になったときに安定した収入を得ることができないため、貧困の連鎖が生じている。実際にフィリピンでは職業選択において学歴は重要な要素となっていて、学歴が低いほど収入の低い職に就く傾向にある。フィリピンに対する支援としては、インフラの整備や自然災害に対する緊急支援が主で、貧困層に対する支援はあまり行われていない。

そこで本稿では、フィリピンにおいて貧困の連鎖を解消するためには、子どもたちを学校に通わせるために子どもたちの栄養源となり、学校に通うモチベーションとなる学校給食が必要であると指摘した。

3 堀田　唯茉
「福島県相双地域の避難指示解除地区におけるまちづくりの一考察」

2022年現在、2011年3月11日に発生した東日本大震災から11年の月日が経過している。東日本大震災は地震に伴って発生した津波の被害に加え、福島第一原子力発電所の事故による放射性物質の影響で大きな被害をもたらした。徐々に避難指示の解除がされてきたが、浜通り地方に位置する相双地域は、未だに帰還困難区域が残っている現状である。避難指示が解除されても住民の帰還が進まない問題をはじめとした避難指示解除地区が抱える課題を解決する必要がある。また復興が進むにつれて生じる課題に対応するためには住民の意向を知ることが大切である。

そこで本稿では、福島県相双地域の避難指示解除地区の現状とその課題を明らかにし、国や行政、住民の意見を比較しながら、今後どのようなまちづくりをしていけば良いのかを議論していく仕組みを提案した。

4 朝桐　颯大
「事業系食品ロス削減のため規格外食品配達サービスの提案」

食品ロス問題を解決することは大きな課題である。現在、日本国内における総食品ロス量は522万トンであり、この量は国民1人当たり約113gでご飯茶碗1杯分に近い量であり、年間で41kgにも及ぶ。また、食品ロスの焼却の際に発生する二酸化炭素量は総二酸化炭素発生量の8%にも及びSDGsの重要度が上がっている昨今の社会情勢において解決に向けて取り組む必要がある。

そこで本論文では、食品ロスを取り巻く現状や問題点を取り上げ、アメリカで提供されている規格外食品配達サービスを事例に挙げ、日本国内の食品ロスを解決するための提案を行った。

5 白井　里奈
「日本におけるヤングケアラー支援の課題と提案～求められる支援の在り方～」

日本社会は少子高齢化や核家族化、ひとり人親家庭の増加、晩婚や晩産化といったさまざまな問題を抱えている。近年では大人が担うような重い責任や負担を背負っているヤングケアラーという子どもたちの存在が社会問題となっている。今後も少子高齢化が進行する日本においては、今以上にヤングケアラーの問題が顕在化することが予測される。これからの社会を担う子どもたちの存在を守ることは、持続可能な社会を創造する上で欠かせない。

そこで本稿では、ヤングケアラーがどうして顕在化しているのか、その原因と課題を明らかにして、この社会問題に対して国が今後取り組むべきものとして取りまとめた施策に、アセスメント実施・ヤングケアラー世帯の情報把握・相談窓口の集約化・Webサイトの充実化を図ることで、ヤングケアラーの支援がより充実したものとなるような提案をした。

学生活動報告

政治の世界を身近に
～田畑裕明議員事務所でのインターンシップ

経営学科　金村 亜美・根岸 康佑

2022年3月と4月、衆議院議員田畑裕明先生のご厚意のもと、有吉秀樹教授のご推薦で各々1週間たばた裕明事務所へインターンシップ生として受け入れていただきました。選挙権を有しながらも政治の世界はどこか新聞や情報番組の向こう側にあり、私たちには縁遠い存在であると考えている学生も多いのではないでしょうか。恥ずかしながら私たちもその1人であり、代議士をはじめ政界に身を置く方々がどのように働かれているのかおぼろげなイメージしか持ち合わせていませんでした。

インターンシップでは、私たちが政治を少しでも身近に感じることができるようにと1週間のスケジュールを組んでくださいました。国会議事堂や議員会館、党本部など一介の学生では訪れることが出来ないような場所へ入らせていただき、その歴史や、どのようにして働いているかに関する事細かなご説明を受けた後、委員会や勉強会に同席させていただきました。議題に熱心に耳を傾け、勉強されている田畑先生の姿を拝見し、政治家とはこうした地道な努力の積み重ねの上に成り立つものなのだと肌で感じました。

金村さんのインターンシップの1コマ～田畑裕明衆議院議員（写真右）と共に

また、来客対応や名簿整理、書類作成など多岐にわたる秘書業務にも携わらせていただきました。秘書の西村寛一郎様が仰っていた「1つ1つの事務所が企業のようなもの」というお言葉通り、代議士を中心に緻密に練られたスケジュールをこなすには秘書の皆様あってこそだと拝察いたします。来客対応ひとつとってみても秘書の皆様の対応は田畑先生への評価へと繋がるため、些細なことへも気を配り誠実に接しておられる姿は非常に勉強になりました。それは私たちも例外ではなく自身が何者であるかを明瞭に名乗り、マナーを守らなければいけません。これは基本的なことですが社会に出る前の学生にとっては意外と難しいことです。私たちが所属する有吉ゼミや有吉教授の“社会を生き抜くセルフブランディング”では学外の方とお会いする機会も多く、自身の一挙手一投足が有吉教授、ひいては大学全体の評価に直結するため行動一つ一つに細心の注意を払うということを意識する必要があると思います。

根岸さんのインターンシップの1コマ～国会議事堂をバックに田畑議員を補佐している上野宏史元衆議院議員（写真右）と共に

ご多忙を極める中でも、私たちの学びのためになればと田畑先生や秘書の皆様と昼食をご一緒させていただきました。とりわけ印象に残っているのは田畑先生とご一緒させていただいた際に伺ったお話です。日々目まぐるしく移り変わる議題に関し、知識を一体いつどのようにインプットされているのかに疑問を抱きうかがったところ、「毎日シラバスを立てるように常に目の前のことと先のことを同時に考えながら計画を立て時間を捻出し、様々なことに興味を持つことで頭に入ってくるようになる」とお答えいただきました。就職活動を控え、学業との両立を図る中でこうした意識を持つことの重要性は大変勉強になりました。

お忙しい中、私たちを温かく受け入れていただいた田畑先生をはじめ事務所の皆様方に深く御礼申し上げます。インターンシップで学んだことを学生生活のみならず社会に出てからも活かしていきたいと思います。

総務副大臣 衆議院議員 田畑裕明様（平成７年３月卒、肩書は当時）のコメント

感受性と向上心を持ち合わせた2人のインターン生を受け入れて、私も大変、勉強になりました。導いてくださった有吉秀樹教授にも感謝申し上げます。政治家は、常に国民生活の安定と国益に資することを「ものさし」として政策議論を行っています。私が向き合う「国民」とはまさに全世代の方々であり、シニア層だけを指すものではありません。学生の皆さんは、もうすぐ社会に巣立つ位置にいます。将来が希望に満ち溢れ、平等にチャンスが保障された社会を皆さんは願うはずです。私は若い世代の方の声を常に意識して政治活動を同志と進めて参ります。成熟した日本社会に活力と世界に貢献する誇り高き国家を創るのは若い皆さん方です。常に学び続ける習慣と意識をぜひ、獨協大学在学中に養い、自身の今後の人生を切り開いてもらいたいです。頑張ってください。

学生活動報告

不易流行の人形業界

経営学科　金村 亜美

「なぜ人は人形遊びをするのか?」「なぜ雛人形や五月人形を飾るのか?」節句人形を飾らない家庭で育ち、幼い頃こそ人形遊びをしたものの今となっては人形と全く接点のない私はこうした漠然とした疑問を持っていた。ゼミの指導教員である有吉教授のご協力のもと、人形業界がどのようにして成り立っているのか、もっと人形業界を盛り上げて私たち消費者との接点を増やしていくためにどうすればいいのか、考えてみたいと思った。

人形の歴史は縄文時代にまで遡る。最初は土偶に代表されるように、神聖な力を持つもの、穢れを払うものとされていたが、時代を経て子供が遊ぶおもちゃとして親しまれるようになった。女の子の裁縫や仕付けの勉強としても機能した市松人形はその代表格である。雛人形の由来は諸説様々あり、中国の五節句の一つである「上巳の節句」や、貴族の間で流行した「ひいな遊び」、平安時代に行われていた川へ紙で作った人形を流す「流し雛」などに起源が求められるという。元々公家や武家など特定の階層の間で行われていた雛人形は次第に大衆化し、広く人々に親しまれる行事として定着していった。また、端午の節句に供えていた菖蒲が「勝負」と近いことから武家の間で重んじられるようになり、家の前などに飾ったのが五月人形の始まりと言われている。

研究を進めるにあたって、有吉教授と株式会社宮入 代表取締役社長の宮入正英様にお力添えをいただき、株式会社吉徳代表取締役社長の山田徳兵衛様にインタビューを行った。この場を借りて深く御礼申し上げたい。「人形は顔がいのち」で知られている株式会社吉徳は1711年に創業され、2011年に創業300周年を迎えた。代々襲名制度を続けており、インタビューに応じてくださった山田様は12世である。お話を伺う中で、特に印象に残った点は、人形の流通経路における問屋の役割についてだ。雛人形は分業制で、頭師や髪付師、着付師、手足師、小道具師などが全国各地に散らばって生産している。1つ1つは極めて小規模な職人集団だ。したがって、流通経路の中で職人たちを束ねる吉徳のような問屋の存在は極めて重要である。各パーツを発注する際も、流行を意識しつつも守るべきところを守る姿勢を常に忘れず、全体の仕上がりを意識しながら、流通経路全体を統括しなければならない。そのためにも、職人たちが感性と高い技術を維持できる環境づくりを行いながら、常に時代を意識し需要の変化に対応する柔軟性も併せ持つ必要がある。近年、住宅事情の変化や旧習の簡素化などにより、節句人形に対する需要も大きく変化した。従来は豪華で煌びやかな七段飾りが持てはやされたが、現在では小さくて高品質なものへと移行している。業界もこうした変化にしなやかに対応していかなければならない。そのため、山田様が「勝たずとも負けるな」と仰っていた通り、どこかが極端な利益を得るばかりに、他社の存続が難しくなってしまうことがないように、業界全体を考える姿勢は分業制の人形業界にとって無くてはならないものであると感じた。

山田徳兵衛様(右から3人目)と共に。左から2人目が金村さん。

また、キャラクターの台頭やバービー人形、リカちゃん人形の登場により、かつては女の子の遊びの登竜門だった市松人形は大きく衰退した。節句人形に依存し過ぎず、さらに消費者と人形の接点を幅広く持たせるような、業界を盛り上げる戦略を考えていきたい。

株式会社吉徳 代表取締役社長 山田徳兵衛様のコメント

五月人形商戦の最中、去る4月11日に獨協大学の有吉教授と金村さんを中心とする有吉ゼミの皆様から弊社や人形業界等についてのインタビューを受けました。その節はお世話になりました。立場上、業界誌等のマスコミから取材を受ける機会は少なくないのですが、大学のゼミからのインタビューは、今までほとんどありませんでした。事前に質問項目は頂戴していましたが、通常の取材等ではあまり聞かれない内容もあり、どうしたら皆様にわかり易く伝えられるか、苦慮する部分もあったのが正直なところです。しかし、普段それほど意識していないことを、改めて整理したり学び直したりすることができ、私にとっても大変貴重な経験となりました。私の拙い受け答えがどれほどお役に立ったかわかりませんが、皆様の研究成果の一助になれば、幸いでございます。

学生活動報告

SEIKO創業家インタビュー

経営学科　渡辺 拓馬

「今何時ですか?」と誰かに聞かれたら皆さんはどうするだろうか。恐らく、多くの人はスマホの電源ボタンを押し時刻を確認するにちがいない。お手軽なスマホがあるこの時代に、なぜ腕時計をつける人が一定数いるのか。疑問に思った私はゼミの指導教員である有吉教授のご協力を得て、時計業界で日本随一のブランド力を持つ「SEIKO」をテーマに研究することにした。

インタビュー会場となった銀座柳画廊にて服部秀生様(前列右)と共に。後列右から2人目が渡辺さん。後列左は柳画廊の野呂副社長

SEIKOと聞くと、銀座四丁目の角に立つ有名なWAKO[1]の建物を思い出す人が多いのではなかろうか。あるいは、百貨店の上階の静かな一角でショーケースに並んでいる煌びやか外装の腕時計の数々が目に浮かぶかもしれない。しかし、「SEIKOはマーケティングではなく、技術力で『世界のセイコー』に駆け上がった会社である」…創業家ご出身でセイコーウオッチ株式会社 取締役の服部秀生様はインタビューの中でそう何度も繰り返し強調された。それは、創業家から見たSEIKOという、私たちが到底及びもつかない別の視点と言ってもいいだろう。

不定時法[2]を採用してきた日本ではヨーロッパとは異なる和時計が生産されてきたが、1872年、明治新政府の「改暦ノ布告」により定時法が採用され、1日の時の分割が欧米式に変更される。時の概念の変化と共に和時計は衰退し、日本では国産の時計が減少、海外の時計が多く輸入されるようになっていった。雨の日になると客足が鈍る他業種を尻目に、海外時計の修理に勤しんでいる時計店に目を奪われた服部金太郎。彼がいずれ来る国産時計の需要を見越し、服部時計店を創業したのは1881年のことである。海外時計の修理からスタートし、技師長の吉川鶴彦と共に、柱時計、懐中時計を開発。1913年には日本で初めての国産腕時計を世に出し、「時計王」と呼ばれ、SEIKOの基礎を築いた。跡を継いだ息子の玄三、正次兄弟のもとでSEIKOはさらに発展し、1969年12月25日のクリスマスに世界初のクオーツ時計を発売。その後クオーツ時計は世界を席巻した。クオーツ時計がコモディティ化し、従来の機械式時計の復権が進む昨今においても、機械式時計の最高峰「グランドセイコー」が人気を博している。また、時計で培った技術的基盤はプリンターや携帯電話に使われる水晶などにも広がり、セイコーエプソン、セイコーインスツルなどSEIKOグループ各社の今日の隆盛の源泉となった。そんな時計とSEIKOの歴史を伝えるセイコーミュージアム銀座をご案内いただきながら見学すると、先ほどの服部様の言葉が身に染みて理解できたように感じる。今回のインタビューと見学をもとに「時計」という商材に対して、ただ時間を確認するだけの道具ではなく、「時計」でしか出せない魅力を消費者に理解してもらえるような戦略を打っていきたい。

服部様はもちろんのこと、インタビューを進めるにあたりお力添えいただいた有吉教授と株式会社白坂企画 代表取締役の白坂亜紀様、株式会社銀座柳画廊 副社長の野呂洋子様、ミュージアム見学でお世話になった館長の相澤隆様、熊谷勝弘様に厚く御礼申し上げる。

1：WAKOビルは2022年6月10日(時の記念日)より、「SEIKO HOUSE GINZA」と名称変更した。
2：不定時法とは昼と夜の時間を6等分し、十二支の名前で呼ぶシステム。このシステムでは夏の昼の一単位は夜よりも長く冬は逆であったため、季節によって時間が異なっていた。

創業家ご出身の服部秀生様（セイコーウォッチ株式会社 取締役）のコメント

この度、獨協大学経済学部の有吉ゼミの渡辺拓馬君の個人研究に弊社を選んでいただいたことを大変光栄に思います。渡辺君の事前学習の成果もあってか、彼の熱心な質問に引きずられ、こちらまで熱弁を奮ってしまいインタビューは長時間に及んでしまいました。又、インタビューのみならず、セイコーミュージアムの見学も彼の研究に少しでもお役に立てたのであれば幸いです。有吉ゼミの益々のご発展と渡辺君の今後のご活躍を心からお祈り申し上げます。

学生活動報告

みずほフィナンシャルグループと向き合った濃密な4ヶ月

経営学科　上原 彩音・佐藤 良祐・シャ カケツ・柳澤 佑・椎木 慧仁・
金村 亜美・根岸 康佑・三浦 萌々香・渡辺 拓馬

日本興業銀行元常務取締役 梅津興三様（前列右から3人目）と共に

誰もが持っている銀行口座。給与振込も公共料金や子供の学費の振り替えも住宅ローンの支払いもすべて銀行口座を介して行われ、今や電気やガスなどと同様、生活のインフラとなった。インフラとしての信頼感や安心感ゆえなのだろうか、これだけ長らく低金利が続いているにもかかわらず、多くの人が銀行預金から離れずにいる。かつての銀行は集めた預金を原資として、その大部分を企業に融資し、日本経済の発展に貢献してきた。しかし、バブル崩壊から30年。融資に回るのは預金の半分程度しかなく、銀行は国債をひたすら購入している。「預金者からお金を預かっている以上、リスキーな投資には手を出せない」という理由を隠れ蓑にして、間接金融が新産業の創出に貢献することはなく、その結果、日本経済は世界から遅れを取ったままだ。今まさに、銀行はその存在意義が問われていると言えるのではなかろうか。

ゼミでの学びの中で疑問を持った2年生の有志が取り組んだ題材はみずほフィナンシャルグループ。金融再編の嵐が吹き荒れた2000年前後に、日本興業銀行（以下、興銀）、富士銀行（以下、富士）、第一勧業銀行（以下、第一勧銀）が経営統合してできたメガバンクだ。都市銀行と長期信用銀行という異例の組み合わせは「壮大な実験」として世間の注目と期待を浴びた。しかし、それから20年。聞こえてくるのはシステム障害のニュースばかり。そのたびに世間からは「また旧行同士で意地の張り合いばかりしている」と噂され、「みずほ」としてのカラーは一向に見えてこない。銀行の存在意義とは何か。また三行統合の本来の意味を見出して融和するためには何をなすべきなのか。指導教員である有吉教授や経験豊富な先

輩方の助言を得ながら、そんな疑問に向き合った。

顧客の行動の裏に隠された本当の気持ち、企業の歴史の奥からかいまみえる企業体質を理解することが重要なマーケティングにおいて、金融にまつわる多様な消費者像、そしてみずほという企業をどのように紐解くか、頭を悩ませた。近年では、銀行口座を持っていても、窓口はおろかATMに行くことすら少なくなった。ましてやローンを組んだり、運転資金や設備資金を借りたりする事業者の心理など、学生の立場では十分にわからない。そこで、金融にまつわる消費者に関して基礎知識をつけるため、群馬銀行や千葉銀行に勤務しているゼミOBの皆さんにお話をうかがうところからスタートする。もちろん、研究者となられる前に銀行勤務の経験のある有吉教授からも極めて重要な示唆を受けた。

さらに、みずほという企業の特徴を追い求めて、合併以前の旧行の特徴や合併に至った背景を明らかにするため、興銀元常務取締役の梅津興三様、富士出身の宮崎将様、第一勧銀出身の櫻木崇之様にインタビューを行った。かつて興銀には「そっぺい」こと中山素平氏をはじめとする日本の行く末を第一に考える国士のような人が多かったという。また、「日本に必要な産業であるか」という観点を重視し、事業性だけでなく経営者をよく見て融資判断を下していたとも伺った。その発言からは、重厚長大産業に設備資金や長期運転資金を投じ戦後日本の復興を支えてきた興銀ならではの自負が感じられる。しかし、1970年代以降、産業構造の転換、金融自由化などにより長期固定貸しの役割が薄れていく。当時の頭取の池浦喜三郎氏のように、産業調査部を増強してあらゆる商材の新たな可能性を模索する動きがある一方で、相変わらず第二次産業に固執する者も多く、国を支える自負心はやがて驕りに変わっていった。大阪の料亭女将の尾上縫、そごう、住専…バブルに踊らされ本来の役目を見失っていく興銀を忸怩たる思いで見つめてきた梅津様。バブル崩壊後、多額の不良債権を抱え、再編を余儀なくされる中、3行による対等合併の道を選んだ興銀に対し、「少数民族である興銀は潰されてしまう」と当初から反対だった気持ちを吐露された。

そんな銀行の苦難の時代に入行された宮崎様と櫻木様。宮崎様のご出身の富士は金融を祖業とする安田財閥の流れをくみ、戦後の「経済主流取引」や東京都をはじめとする多くの自治体の指定金融機関となって、公金取扱で勢力を広げてきた。そこには、対等合併を経験することなく、トップバンクの座に君臨してきたという「名門意識」が色濃く反映されている。また、1971年の合併によって富士からトップバンクの座を奪った櫻木様のご出身の第一勧銀。インタビューだけではその特徴は容易にはつかめなかった。しかし、さらにその前身を遡っていくと、第一銀行には渋沢栄一によって創設された第一国立銀行以来の「名門意識」が、日本勧業銀行には国策的に農業の発展に寄与してきたという点で興銀と似た「国を支える意識」が存在した。その一方で、合併して25年たっても人事部が2つ存在したり、書類の渡し方一つとっても旧行の流儀を貫いたりと、櫻木様のお話からは対等合併の難しさを一足先に経験した第一勧銀ならではの苦悩も浮かび上がった。

システムトラブルを起こすたびに旧行同士の意地の張り合いと世間から叩かれてきたみずほ。宮崎様のお話によると、上層部からは「旧行の話をしたり、旧行出身者だけで集まったりしないように」などという指示まで出ているそうだ。しかし、その弊害も多く、「若い行員が旧行の歴史を知らなさ過ぎる」と顧客からクレームがつくようになったり、旧行の持っていた特徴が薄まり、何のイメージも浮かばない「ただ規模が大きいだけのメガバンク」になったりしている。この20年で流出した優秀な人材の中には弁護士や会計士、コンサルティングファームなど異なるフィールドで活躍している者も多く、「優秀な人材を取るのもうまいが、流出させるのもうまい」などと揶揄されることもあるくらいだ。戦略では、これら銀行を去った者たちと残った者たちがタッグを組み、スタートアップ企業の発掘と育成に関わることを提案した。戦略の結果、「名門意識」や「国を支える気持ち」など旧行の特徴を甦らせ、合併後の真の融和と銀行の存在意義が取り戻せるようになることを願っている。最後にインタビューにご協力くださった梅津様、宮崎様、櫻木様はもちろんのこと、インタビューを進めるにあたりお力添えいただいた有吉教授、株式会社IBJ社長の石坂茂様、OBOGの皆様に厚く御礼申し上げる。

（文責：経営学科4年　柳澤 佑）

元 日本興業銀行 常務取締役 梅津興三様（現：株式会社 IBJ 社外取締役）のコメント

先般思いがけなく若い学生さん達と話し合う機会に恵まれこと、先ず私としては大変に嬉しく且つ感謝致したいという気持ちです。事前に戴いた質問項目を読んで、これは我が国経済の高度成長期そして停滞期への流れを元金融マンの立場で率直に述べなければと強い緊張感を覚えました。1980年代初頭までの日本の産業力勃興に脅威を感じた米国は（ジャパンアズナンバーワン）、米国流の官民一体で日本の官民一体体制を崩すべく1985年から一連の対日戦略を展開しました（プラザ合意、BIS規制、ヤングレポート、株持ち合い規制、格付け等）。それらに日本側が素直に順応し過ぎた結果（円高による海外生産等）、他の要因（不動産バブル）もあるが、日本の国力が落ちてその後の失われた30年を経ることになりました。こうした流れに自分達の世代には大きな責任があったと深く反省しております。勿論みずほGの停滞もさほど国家に貢献しなかった点で猛省です。

幸いにも近年、スタートアップ企業・リスクマネーを提供するプライベートエクイティファンドの活躍、円安下での生産工場回帰等、一方で官民の研究開発向上の気運が高まりつつあり、これからの若い皆様が過去の反省を糧にして、我が国の産業力・経済力を高めていくことを切に希望致します。

学生活動報告

福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」(1、2年目の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」と3年目以降の「集落自主活動に係る伴走支援事業」)の活動報告

「大学生と集落の協働による地域活性化事業」コーディネーター 国際環境経済学科教授　米山 昌幸

2022年度の福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」には、「集落自主活動に係る伴走支援事業」に「大竹ゼミ耶風班」「セガワ応援隊」「ほんそんみらいプロジェクト」が、そして「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に「地域活性化プロジェクト米山チームPart2」、新規の「地域活性化プロジェクト入水チーム」が、それぞれ申請・採択された。今年度はコロナ禍が収まってきて、すべてのグループが現地活動を実施することができた。

各グループは、2月には県が主催する活動報告会に参加して、活動内容について発表し、報告書をまとめることになっている。各グループとも翌年度に向けて活動を継続していくことに意欲を示している。以下に各グループの活動報告を紹介する。

南会津町耶風担当「獨協大学大竹ゼミ耶風班」の活動報告

代表 国際環境経済学科2年 小林 恵菜

大竹ゼミ耶風班のメンバーは、チンナイセン(経営学科4年)、蜂谷康旗(代表:国際環境経済学科3年)、齊藤小町(同3年)、樋山諒洸(同3年)、高村昭汰(経済学科3年)、小林恵菜(代表: 国際環境経済学科2年)、高野桜(同2年)、伊東瑞穂(同2年)、湯田光(経済学科2年)、安本亮太(経営学科2年)、井上哲男(同2年)の11名です。大竹ゼミ耶風班の活動は、2017年からの継続事業として本年で6年目を迎えています。

夏休みには数名で耶風地区のトマト農家の収穫の手伝いや直売所での販売アルバイトを泊まり込みで行いました。一昨年からコロナの影響で現地に行けない状況が続いてましたが、1人約2週間の滞在ができました。南郷トマトや蕎麦などの特産品についてよく学ぶきっかけになり、地域の方々と親交を深める機会になりました。

収穫したトマトの袋詰め作業の様子

また、11月には学生2名と耶風地区の方2名で新潟県のハス農家に研修に伺いました。新潟県で実際にハスを育てている方に聞き取り調査を行い、今後の予定について話し合いました。来年以降に耶風地区でもハス畑を利用した観光事業を考えています。

ハス栽培についての聞き取り調査

12月12日から17日までの期間に行われた“Earth Week Dokkyo”では、耶風地区のPRと南会津農産物の販売促進を目的とした直売会を実施しました。以前よりも多数の商品を用意しましたが、地域住民の方へのポスティング効果で多く方にご来場いただきました。次回も事前に地域の方への告知を行うとともに、学生の関心を引けるような工夫をしたいと考えています。

“Earth Week Dokkyo”で開催した「福島県南会津町物産展」

田村市船引町瀬川地区担当「獨協大学セガワ応援隊」の活動報告

代表 経済学科3年 志賀 陽

田村市船引町瀬川地区を担当する獨協大学セガワ応援隊は、志賀陽(代表: 経済学科3年)、山本桃花(副代表: 英語学科3年)、内山輝(会計: 同3年)、石川育実(フランス語学科3年)、松井海紀(同3年)、原田奈穂(国際環境経済学科1年)、黒木健登(法律学科1年)、岡部将太(総合政策学科卒)、の6学科7名と卒業生1名からなるチームです。

11月12・13日に現地調査を実施し、新そば収穫祭＆軽トラマルシェの手伝いをしました。1日目には聖石温泉や旧瀬川中学

校、瀬川小学校の調査、そば打ち見学をしました。また、学生がファシリテーターとなり、ワークショップを開催しました。実際に現地の方と話すことで、現地の方が考える課題や魅力、取り組みたいと考えていることに気づくことができました。2日目には新そば収穫祭＆軽トラマルシェの手伝いを行い、来場したお客様や運営している瀬川地区の方々と交流できました。

瀬川住民センターで地区の課題発見のためのワークショップを開催

軽トラマルシェで軽トラの荷台にマルシェ木箱を並べる傾斜台を準備

またセガワ応援隊として、12月12～17日に行われた“Earth Week Dokkyo”では他の地区と合同で「福島県復興支援物産展」を開催しました。特産品であるエゴマ油やそば粉のほかに、ハヤトウリやアピオスといった、あまりなじみのない珍しい野菜など、多様な商品を販売しました。商品の出品者の顔写真を送っていただき、学生たちで商品を説明するチラシを作成して商品の案内をするなど工夫をして、多くのお客様に手に取っていただきました。来年度は福島県地域創生総合支援事業に申請することになります。現地の方と今後もミーティングを重ね、継続的な関係性を築いていきたいと思います。

喜多方市高郷町本村地区担当「獨協大学ほんそんみらいプロジェクト」の活動報告

代表 経営学科4年 小山 健司

喜多方市高郷町本村地区を担当する獨協大学ほんそんみらいプロジェクトは、小山健司（代表：経営学科4年）、堀田唯茉（同4年）、白井里奈（国際環境経済学科4年）、吉田華（経営学科2年）、丹野悠太（国際環境経済学科2年）、猪爪麻衣子（フランス語学科卒）、清野芽生（同卒）、窪谷ちひろ（英語学科卒）、飯田佳暖（フランス語学科卒）、宮本圭（国際環境経済学科卒）、の2学科5名と卒業生5名からなるチームです。

昨年度から現地活動が再開し、今年度はオンラインと現地活動の併用で活動を行いました。まず、11月19･20日には今年度初めての現地活動を行いました。今回の現地活動では、在学生4名、卒業生3名の計7名が参加しました。コロナを配慮し集落の方々との交流が制限される中での活動でしたが、実際にフットパスコースを歩いてみたり、フットパスコースに設ける予定の看板をデザインしたり、OG･OB在学生別に記念樹を植栽したりと様々な活動を行いました。

これまでフットパスコースの整備や看板･のぼり旗の制作などフットパスの実施に向け準備を進めてきましたが、多くの方々に参加してもらい、フットパスを通じて本村の魅力が伝わるようなものにできるよう、今後もフットパスの実施に向け準備に取り組んでいきたいと思います。

フットパスコースの看板作りの様子

記念樹の植栽

また、12月12～17日に行われた“Earth Week Dokkyo”では他の地区と合同で「福島県復興支援物産展」を開催しました。本村地区からはお米を出品し、集落の方と協働して販売をしました。学生や職員だけでなく、一般の方など多くのお客様に手に取っていただき、少しでも本村について知ってもらう機会になったと思います。

今年度の活動を通して、私たち学生メンバーは本村地区のためにできること、やるべきことを学生ならではの視点から考え、可能な限り実行していこうと思いました。そして、これからもプロジェクトメンバーと地域で協働して本村地区のさらなる活性化に貢献していきたいと思っています。

小野町谷津作行政区担当「獨協大学地域活性化プロジェクト米山チームPart2」の活動報告

経営学科3年 福永侑眞

小野町谷津作行政区を担当する米山チームPart2は、福永

侑眞（代表：経済学科3年）、岡田遥高（同3年）、石川万優深（ドイツ語学科3年）、山本歩生（経営学科3年）、清水純（同3年）、坂口諒（国際環境経済学科2年）、梅橋萌（フランス語学科1年）、舩上由紀（同1年）の5学科8名からなるチームです。

今年度の米山チームPart2はメンバーが大幅に変わったこともあり、小野町や谷津作地区の魅力や資源を学びなおしてきました。10月29･30日には現地に入り実際に自分たちでまちの雰囲気や魅力について知ることができ大変有意義な時間でした。29日の夜には住民の方々と意見交換会を行い、また、30日にはまちのイベントである「小町ふれあいフェスタ」に参加し、イベントに来ていた方々と交流するなど様々な経験をさせていただきました。また、今年度も小野中学校の学生とオンライン上で交流する「TERAKOYAプロジェクト」にすでに参加しており、中学生と大学生の交流を通じて地元の学生との継続的な関係性の構築を目指しています。12月12～16日には大学内にて「福島県復興支援物産展」を他地域のチームと合同で開催し、特産品などを通じて小野町をPRしました。メンバーと現地の方々で話し合いながら出品する商品を決め効果的なPRができるよう工夫をしました。今年度の活動で得た経験は初めてのことも多く新鮮であり、こうしたことを来年度以降、地域とのさらなる交流や活性化につなげていくことが重要であると私たちは考えています。

住民との意見交換会の様子

小町ふれあいフェスタでの健康ブースの接客補助

田村市滝根町入水行政区担当「獨協大学地域活性化プロジェクト入水チーム」の活動報告

代表 交流文化学科3年 森岡澪音

田村市入水行政区を担当する入水チームは、森岡澪音（代表：交流文化学科3年）、藤田大地（同3年）、日野原楓（国際環境経済学科2年）、北山三湖（同1年）、加納航大（国際関係法学科2年）の3学科5名からなるチームです。

入水行政区を活性化することを目標に今年度結成されたばかりのチームで、今年はじめて採択されました。今年度は、今後活動を進めていくために、現地の方との関係性を築くこと、現地の実態を調査することを目的に、10月と12月の2度、現地調査を行うことができました。

10月15･16日に行った初回の現地調査では、入水行政区を知ること、現地の方と親睦を深めることを目的に調査を行いました。入水鍾乳洞、菅谷神社、入水寺や三十三観音巡りをはじめとする入水行政区や田村市内の観光名所を調査しました。調査の最後には、入水行政区の集会所にて現地の組長の方々から行政区内の現状についてヒアリングを行い、「入水がどうなって欲しいか」を聞き取ることができました。

入水鍾乳洞駐車場にある、かつて賑わっていた釣り堀センターの視察

12月10･11日に行った2回目の現地調査では、入水行政区内の星の村ふれあい館に宿泊しました。11日には、住民の方が建てたパンカラ小屋にて、地域の若者の方々とピザを食べながら意見交換をしました。今後の地域を担う若者世代の率直な意見を聞くことができ、新たな発見となりました。その後、集会所で行政区の組長の方々と今後の活動について話を進めました。現地の方々との交流を深めることができた2度目の現地調査でした。

パンカラ小屋で焼いていただいたピザ

12月12日～16日に行われたEarth Week Dokkyoの福島県復興支援物産展では、入水地区で生産されている「あぶくま天然水」を販売しました。学内の皆様にたくさんご購入をいただき、完売することができました。

今年度の入水チームの活動は、現地の方との交流を深めることが主な活動となりました。2度の現地調査を通して現地の方のあたたかさを感じることができました。来年度以降は、今年度の活動を踏まえ、現地の人に寄り添いながら、より具体性を持って入水行政区の活性化に関わっていきたいと考えています。

学生活動報告

福島イノベーション・コースト構想推進機構「2021年度大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」採択事業「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」の活動報告

事業責任者 国際環境経済学科教授　米山昌幸

本学は「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」をテーマに、2021年度から2025年度までの5年間、本学と田村市をはじめとした福島県の浜通り市町村等との間で継続的な関係を構築し、「外国語教育」「環境教育」「地域づくり」事業を展開しています。「持続可能なまちづくり」を通じ、SDGs達成に貢献できる人材と同地域の復興に貢献する人材を育成しています。以下に、学生スタッフの現地活動の実施報告を紹介します。

学生スタッフ活動報告「Fukusima Future サミット（F2サミット） in たむら」への協力

松枝ゼミ学生スタッフ 国際環境経済学科3年　山田 萌

4月9日（土）・10日（日）

「2022年度F2サミット in たむら」事前研修会①への協力のため松枝ゼミ生8名が田村市を訪問しました。この研修会は、市内の中学生が集い、地域の課題について話し合い、まちづくりに関心を持ってもらうことを目的として実施されました。私たちがゼミで進めている「大学生による環境教育支援プログラムの構築とその実践的評価」においても、環境教育の方法論を模索するとても良い機会となりました。実践活動として、F2サミットのコアメンバーである市内の中学生に対し、「地球温暖化と身近な気象変化」と「リサイクルと私たちの暮らし～ファッション産業を通じて考える未来のあり方～」をテーマに、身近な環境問題についてプレゼンテーションを行いました。その後のワークショップでは、大学生がグループごとにファシリテーターを務め、地域の課題について共に議論し、付箋を活用したブレーン・ストーミング法を実践してアイデアの整理を行う作業を支援しました。最後に中学生による発表を通し、研修会①の成果をまとめました。

6月25日（土）・26日（日）

事前研修会②「田村を知る」では、現地視察による田村市の再発見への協力のため松枝ゼミ生からは7名の学生が田村市を訪問しました。この研修会では、現地視察・グループ発表を行いました。廃校舎を活用したワーキングスペース、テラス石森を見学した後、2コースに分かれ、田村市で活躍する農園や野菜工場の経営者のお話を直接聞き、故郷を大切にする心に触れ、まちづくりへの関心を高めることができました。その成果をグループごとに発表するワークショップでは、視察内容をまとめるにあたり、大学生は資料作成の補助と発表指導を行いました。

2回の事前研修会に参加して、中学生とも親しく話ができる関係となりましたが、コロナウイルス感染拡大のために本番のF2サミットに参加できなかったことは非常に残念でした。でも、実際に現地での実践活動を通した環境教育の必要性を確認することができました。今回の経験をゼミ活動のテーマである環境教育に役立て、発展させていきたいと考えています。

F2サミット事前研修会②におけるワークショップ

観光資源・歴史資源・市街地の現地調査

尾玉ゼミ学生スタッフ フランス語学科3年　吉江 隆太郎

5月21日（土）・22日（日）と7月2日（土）・3日（日）の2回にわたり、イラストマップの作成を主目的としつつ、地元学（田村学）や環境資源の観点から現地調査を行いました。

5月21日には市中央の常葉エリアを調査しました。国道288号沿いの絵本専門店の石川屋、舘公園（常盤城跡）、エリア北部のスカイパレスときわ、南部の磯前神社などを訪れました。

めずらしい懸造りの磯前神社（常葉エリア）

翌22日には市北西部の船引エリアでまち歩きを含む調査を行いました。田村市歴史民俗資料館、田村市図書館本館、JA福島さくら農産物直売所「ふぁせるたむら」でインタビューを行い、屋形・朴橋・堀越のお人形様を訪れ保存会の方のお話を伺いました。

7月2日には5月に訪れることができなかった船引エリアの安倍文殊堂、せがわ食堂を訪れ、聖石温泉でインタビューを行いました。午後には市東部の都路エリアにあるグリーンパーク都路、行司ヶ滝、よりあい処華を訪れました。翌3日には市南部の

滝根エリアにある入水鍾乳洞、あぶくま洞・ラベンダー畑、星の村天文台、仙台平、かなや食堂、神俣駅周辺（西山産業）を視察しました。

2回の現地調査を通じて市内の多くの史跡や観光資源に触れ、様々な方からお話を聞くことができ、田村市に関する理解が深まりました。私は農産物に関心があり、田村市には多くの魅力的な農産物がありますが、それらを上手に発信、ブランディングしていくことが必要なのではないかと思いました。そうすれば新規就農者を増やすこともできるのではないでしょうか。

田村市の農業関係の実態調査
大竹ゼミ学生スタッフ 3年　大脇 宝

11月3日（木・祝）～6日（日）の4日間に田村市の農業関係の実態調査を行い、11名の学生が参加しました。地域の担い手になると期待される農家や企業を訪問し、ヒアリング調査を行い、田村市の農林水産業のPRに貢献するのが目的です。また、直接訪問することで地域の方たちとの信頼関係を気づくとともに、地域振興につながる活動を地域の方たちと一緒に行っていきたいと考えています。

今回調査に協力していただいたのは、トマトをはじめ多種類の野菜を「おいしさ」にこだわって栽培している「たむらさくま農園」、山から湧き出る清水を使って肉厚キノコを栽培している「移ヶ茸」、地域の伝統産業であったタバコ栽培の副産物（腐葉土）の有効利用から始まったカブトムシ観察施設「ムシムシランド」、全国に約80名の弟子を持つブドウ栽培農家「鈴木農園」、無農薬有機栽培にこだわり無添加加工食品を生産している「福福堂」、土づくりにこだわり美味しいイチゴを栽培している「ふらっとファーム」、震災による風評被害に苦しむ田村市に新しい農名物を作りたいという思いから始められた養鰻業と加工品開発をおこなっている「福うなぎ」、農業高校教諭を退職後、新しいに作物栽培に挑戦して農村地域の振興に尽力している「ひまわり農園」、地域内の耕作放棄地削減を目指してサツマイモ栽培や加工品生産に取り組む「松や農園」の8軒です。

皆さんそれぞれのこだわりを持って栽培（飼育）を行っているだけでなく、地域や周りの人々の役に立ちたいという思いを持った方々でした。お話を伺って農業に対する知識だけでなく、社会人として大切なことも教えていただきました。このような農家さんたちを応援することが、私たちにできる「持続可能なまちづくり」の一つだと思い、今後PR活動を行っていく予定です。

福福堂の稲福由梨さんと記念撮影

田村市役所の担当課職員と意見交換会
国際環境経済学科1年　原田 奈穂

11月3日（木・祝）・4日（金）の現地視察、田村市職員との意見交換会では、教員スタッフ2名、学生スタッフ4名が田村市に足を運びました。

3日には田村市伝統芸能の実態調査を行い、大越町栗出見渡神社において巫女舞、三匹獅子舞、神楽獅子舞の奉納、船引町大倉集会所において大倉神社の太々神楽の笠揃いを視察しました。子供を含む住民が協力しあい、地域で脈々と受け継いできた伝統であることを肌で感じ、自然と一体となって歩んできた暮らしを垣間見ることができました。

4日には、田村市役所の担当課職員と意見交換会を行いました。学校教育課とは環境教育・SDGs教育の提供、イラストマップ制作、地元学（田村学）の教育プログラム構築、外国語教育の提供についての提案を行い、実現可能性、具体的方向性について議論しました。観光交流課と観光サイトの多言語化プロジェクトについて、今後の日程、翻訳の精度、運用方法について認識のすり合わせを行いました。商工課とエコノミックガーデニング事業調査など、協力が可能な分野があるか、構想の内容について回答をいただきました。財政課とは廃校の利活用方法を提案、そのメリットとその手続きや実際的な課題を共有しました。生活環境課・企画調整課と脱炭素に向けた田村市地球温暖化対策実行計画、再生可能エネルギー推進など環境・エネルギー施策について提案をしました。企画調整課と復興知事業全般と今後の現地調査について意見を交換しました。また、7月に就任した小野淳一副市長を表敬訪問いたしました。

今回の訪問でプロジェクトの課題の洗い出しを行い、今後やるべきこと、私たちに必要とされていることが明確になりました。また、現地に出向いたことで伝統芸能を受け継ぐという強い熱意に感動し、地域の住民の方々と談笑する機会があったことで、田村市により愛着をもって活動をしてゆく機会になったと感じています。

本番に先立ち大倉集会所にて、区長らの前で御披露目となる笠揃いで、神楽を奉納する子供たち

学生活動報告

国際環境経済学科・環境共生研究所共催 獨協大学環境週間 “Earth Week Dokkyo 2022”の開催報告

Earth Week Dokkyo実行委員会　夏季代表　小束 恵生奈　副代表　日野原 楓・小林 恵菜
冬季代表　日野原 楓　副代表　小林 恵菜

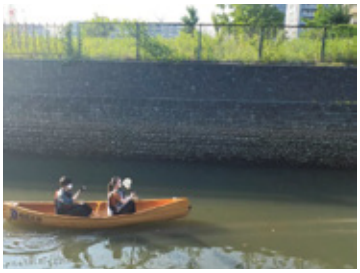
今年度の“Earth Week Dokkyo 2022”も、6月と12月の2回開催しました。獨協大学として環境週間「地球を考える1週間」を設定し、持続可能な地球社会の実現を目指すイベントを実施することで、学生、教員、職員の意識を高めてキャンパスライフを見直し、持続可能な社会を創ることを目的としています。

このイベントは、国際環境経済学科の1期生が提案し、Earth Week Dokkyo実行委員会という企画・運営を手掛ける運営主体を設けて、2016年に初めて開催されました。このイベントも、今年度で通算13回目の開催となります。実行委員会には、多様な学部・学科の学生が所属しています。多くが大学内で行われるイベントですが、学外の方からも多くのご支援をいただき、イベントを盛大に開催することができました。今後も、1人でも多くの学生や教職員、地域の方々と、持続可能な社会を生き抜くために協働するきっかけを提供できるイベントづくりをしたいと考えています。

“Earth Week Dokkyo 2022～Summer～”

6月27日から7月2日までの1週間、“Earth Week Dokkyo 2022～Summer～”開催され、23団体がワークショップやディスカッション、授業公開、ポスター展示などの企画を行いました。特に印象的だったイベントを以下に紹介します。

6月29・30日には、米山ゼミ「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」によるイベントとして、「カヌー体験会・ワークショップ」を行いました。雄飛ホールで行われた学生主催のワークショップでは、埼玉県飯能市の間伐材で製作された、カヌーを活用した浮遊ゴミの回収作業、水質調査などの活動報告や下水道に関するレクチャーを受けました。その後は伝右川でカヌー体験を行い、実物を見て、川の汚れを理解しました。当日は猛暑日でしたが、水辺は涼しく、自然の力を感じることができました。参加した学生からは、「身近な環境の問題点を見つけ、親しみを持つことができ、どう川をきれいにするかを考える機会となった。」と感想がありました。


カヌー体験の様子

書道部の展示

27日からは、書道部と美術部の展示とボランティアサークルUNI-BLOCKSによる、海洋ゴミの募金活動がスタートしました。書道部の展示では、環境にまつわる言葉や標語が書かれた作品が飾られました。また、募金活動では5日間で、合計17,241円を募り、集まった全額を、海洋ごみの調査や普及啓発など問題解決のために活動している一般社団法人JEANへ寄付し、莫大な費用を必要とする海洋ごみ問題の解決へ貢献します。

28日には、ジェンダーやセクシャリティなど性の視点から「1人ひとりが自分らしく生きる」ことができる社会を目指して獨協大学で活動する学生団体THE Meによる「カミングアウトで気をつけたいこと!～アウティング～」が開催されました。オンラインと対面それぞれでワークショップを行い、普段はなかなか周りの人と話せないLGBTQ+に関連した内容を話すことができ有意義な時間となりました。

29日には、「獨協から地球に優しい暮らしをオシャレに楽しく」をモットーに環境問題を中心に発信する団体From us to earthが「人と環境に優しい歯磨き粉WORKSHOP」を開催しました。身近な歯磨き粉が環境と人体に及ぼす悪影響を理解することができました。

歯磨き粉ワークショップの様子

同日には、BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～が「難民の話を聴く会～私たち学生にできることを考える～」を開催しました。ナイジェリア出身の難民申請者であるエリザベスさんが登壇し、仮放免という不安定な立場に置かれながら日本で生活する苦悩や日本の難民を取り巻く環境の現状を聴くことができました。

30日には、Earth Week Dokkyo実行委員会が、中央棟ハーブガーデンのハーブを使って作成したハーブ束の配布を行いました。環境に親しみを持ってもらうこと、ハーブ水を作りマイボトルを持参するきっかけを提供することが目的でした。昼休みに配布を開始し、多くの学生・教職員の方々に配布することができました。

“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”

12月12日から17日まで開催された“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”では、ディスカッションやワークショップ、展示などの16の企画が行われました。主なイベントを以下に紹介します。

期間中の12日～16日には、学生センターにて福島県復興支援物産展とLANKAによるフェアトレード商品の販売が行われました。福島県復興物産展では、福島県の瀬川、入水、耶風、本村、小野町の5地区の特産品を販売し、連日多くの方が訪れ

雄飛ホール外側で地域住民の方に特産品の販売をする様子

こしひかりを販売する様子

ていました。

12日には、学生団体THE Meによる企画「今知っておきたい!就活とジェンダー＃メイク＃服装＃男女差」が行われました。大学生にとって身近な出来事である就職活動と、そこで起きるジェンダー問題についてTHE Meメンバーと参加者でディスカッションをしました。

エコキャンパスツアーの様子

同日、施設事業課と米山ゼミによる西棟の省エネ・創エネ設備の見学ツアーが行われました。このツアーでは、普段入ることのできない西棟の屋上にも行くことができ、なぜ獨協大学がエコキャンパスと呼ばれているのか、実際の設備を見ながら学ぶ貴重な機会となりました。

13日には、BOND～外国人労働者・難民と共に歩む会～獨協支部による企画「難民の話を聞く会～私たちにできることを考える～」が行われました。この企画は、教室とZoomを利用したハイブリッド形式で行われ、以前入管施設に収容され、現在は仮放免中の難民の方のお話に多くの方が耳を傾けていました。クルド難民の当事者からお話を聞くことで、入管問題の深刻さをよりリアルに感じることができました。そして、私たちが学生として何ができるのかを考えるきっかけとすることができました。

難民の話を聴く会の様子

15日には、施設事業課、石本建築事務所、ヴェオリア・ジェネッツ株式会社、米山ゼミによる「公開省エネ推進会議」、Earth Week Dokkyo実行委員会による「エッグキャンドル制作ワークショップ」、国際教養学部スタッフによる「クリスマスパーティー」が行われました。「公開省エネ推進会議」では、キャンパス内の省エネについてディスカッションを行いました。12月より実施されているライトダウン活動についての話し合いも行われました。「エッグキャンドル制作ワークショップ」では、16日の点灯式に向け、卵の殻と学生食堂で出た廃油を利用したエッグキャンドルの制作を行いました。

「クリスマスパーティー」では、SDGsに関するビンゴを始めとしたゲームを実施しました。ゲームを通して、SDGsや環境問題について楽しく学ぶ機会となりました。

クリスマスパーティーの様子

16日には、3つの企画がおこなわれました。大竹ゼミによる「唐辛子リースのワークショップ」では、福島県の農家さんからいただいた唐辛子を使って、リースの制作を行いました。

昼休みに行われた大竹ゼミ、米山ゼミ、大坪ゼミによる「草加の野菜を食べよう!～ピザ窯で作るピッツァ～」では、大学のある草加市で収穫された旬の野菜を使った手作りのピッツァが振る舞われました。ピザの配布場所である中庭には、多くの学生が集まり、大盛況となりました。参加者は地産地消の大切さを実感することができました。

中庭でピザを焼く様子

Earth Week Dokkyo実行委員会による「エッグキャンドルナイト～電気を消して、豊かな時間を～」では、前日のワークショップで制作したエッグキャンドルの点灯式が行われました。エッグキャンドルの暖かな光が会場全体を包み込み、穏やかな時間を過ごすことができました。捨てられてしまう材料を再利用し、電気を消しました。エコに楽しく省エネを体感することで、日々のエネルギー使用量を考え直すことができる機会となりました。

エッグキャンドル点灯式の様子

学生活動報告

講演・討論会「第8回 フクシマの未来を考える ～大学生のうちに知っておくべきこと～」開催報告

コーディネーター 国際環境経済学科 米山昌幸

6月29日(水)に天野貞祐記念館大講堂で開催された、今年度の「フクシマの未来を考える」では、復興知事業の学生スタッフの活動紹介と現地視察について報告し、本事業の課題を明確化して、パネルディスカッションで今後の活動を展望しました。

昨年度来より、学生スタッフは実態調査、翻訳スタッフは観光サイトの多言語化に取り組んでいて、2年目の今年度は、Fukushima Future サミット(F2サミット)の事前研修会に協力したり、イラストマップ制作に向けた準備が始まっています。ここでは、学生スタッフの活動報告について紹介します。

経済学部国際環境経済学科2年　日野原 楓
経済学部経営学科2年　尾内 文音

復興知事業学生スタッフからは、昨年度の活動を報告しました。まずは2回に分かれて現地視察を行いました。田村市を知ることを目的に、観光地や現地での活動拠点となるテラス石森などを訪問しました。その後、現地視察の経験を活かし、主に事前調査に取り組みました。インフラ・観光地・エネルギー分野など12項目に分かれ、持続可能なまちづくりの実現に向けて私たち学生が提案できることは何かと自問自答しながら作業を進めました。しかし、学生スタッフには、多様な学部・学年の学生がいて、論文執筆に近い作業に苦手意識を持つ学生も少なくありませんでした。そのため、昨年度内の報告書完成には至りませんでしたが、今年度も引き続き作業を行っています。昨年度の反省点を活かし、今年は対面でのコミュニケーションを大切にし、学生の好奇心を大切にしながら、得意分野と苦手分野をそれぞれ補い、チーム一丸となって活動を続けていきます。

学生スタッフの活動報告の様子

国際教養学部言語文化学科4年　田中 珠璃愛

私は、復興知事業において多言語化プロジェクトに参加しました。多言語化プロジェクトでは、9つの言語に翻訳する作業を行っており、私はロシア語の担当として作業を行っています。言語の翻訳作業ですが8月現在、ドイツ語やフランス語、韓国語、タイ語の4言語がネイティブの方もしくは指導教員によってほぼ添削が済んでいる状態で、トルコ語とロシア語の作業進行度が遅れています。

コロナ禍や現在の情勢の変化、田村市のイベントの日程変更などによる掲載内容の変更などの影響を受け、どのように情報を更新するか、どのように対応していくかということが焦点となっています。今後の展望としてウェブサイトの多言語化に加えて、今回行った多言語化プロジェクトに関して発信していくことが今後の課題だと考えます。

経済学部国際環境経済学科3年　山田 萌

私たちは「大学生による環境教育支援プログラムの構築とその実践的評価」と題して、田村市教育委員会と連携し、「Fukusima Future サミット(F2サミット) in たむら」の事前研修会において、市内の中学生に向けた環境教育・SDGs教育に協力しました。F2サミットでは、ふくしま12市町村の中学生がSDGsや出身市町村や福島県の将来について議論し、意見をまとめます。

F2サミット事前研修会①では、地球温暖化と田村市の気象変化や洋服のリサイクルについてプレゼンテーションをし、事前研修会②では、現地視察とグループ発表を行いました。これらは、まちづくりへの関心を高め、故郷を大切にする心を育むとともに、出身市町村や福島の未来を支える人材としての意識付けを目的としています。F2サミットに向け、持続可能なまちづくりにつなげるために何が必要か、環境教育の実践体験から考えていければと思っております。

外国語学部フランス語学科3年　行場(ぎょうば) 桃花

尾玉ゼミの田村班では5月21日に常葉エリア、22日に船引エリアを中心に現地調査を行いました。現地調査を終えて人口密度の低さ、とりわけ若者の少なさを認識しました。観光資源がたくさんあったため観光地としてのPR促進ができると感じました。尾玉ゼミではそれぞれの研究テーマや関心が近いもの同士で集まって活動しています。観光客を集めるためのイラストマップ制作を行うイラストマップ班、田村市でのSDGsと人権教育の推進を目指すSDGsと人権教育班、地域に愛着を持ってもらうための活動をする地元学班と田村市でのイベント提案をしていくイベント班に分かれて活動しています。

パネルディスカッションの様子

学生活動報告

「第8回 伝右川再生会議2022」開催報告

コーディネーター 国際環境経済学科 米山昌幸

伝右川再生会議は2014年度に伝右川再生支援プロジェクトが大学創立50周年記念事業に採択され、第1回が開催されて以来、コロナ禍で中止となった2020年度を除いて毎年開催しています。

12月21日(水)に天野貞祐記念館大講堂で開催された第8回となる今回は、昨年度に続いて、埼玉県環境科学国際センター水環境グループ担当部長木持 謙先生に基調講演をお願いし、パネルディスカッションでは伝右川の汚染原因となっている生活排水の対策について議論しました。ここにパネリストとして登壇した学生のコメントを紹介させていただきます。

米山ゼミ 国際環境経済学科2年　島田 隼人

私たち「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」は、伝右川へ流れ出る汚水の流入源を調査するために、伝右川の流域調査を行いました。実際に川沿いを歩いて調査を行い、汚れた水が大量に伝右川に流入している場所や水が変色してしまっている場所などを、自分自身の目で確認しました。調査を終えて、家庭で使用した生活排水を浄化する合併浄化槽の普及を促す活動に加えて、家庭から汚れた水を排出しない方法を啓発していく必要があると再認識しました。

「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」の流域調査報告

今後の活動では、川でのごみ拾い活動と汚れた水の排出を減らす啓発活動を行っていきたいと思います。私たちの身近にある伝右川という自然資源が、多くの人に親しみを持ってもらえるように今後も活動していきます。

米山ゼミ 国際環境経済学科2年　菅野 琴音

私は、流域調査以外のプロジェクト活動について報告しました。今年度は、埼玉県主催の「春のプラごみゼロウィーク」や「川ガキ体験事業」への参加、“Earth Week Dokkyo～Summer～”でのカヌー体験会、生きもの調査などを実施しました。環境・国際団体DecoやNPO法人草加市カヌー協会の方々の活動報告を聞いて、私たちも今より一層、活動を活発化させていかなくてはいけないと改めて考えさせられました。

今後は、汚水排出防止の啓発活動と共にカヌーを使った清掃活動および体験会等の開催の回数を増やしていきたいと思います。これからも伝右川の水質改善を目指し、活動していきます。

松枝ゼミ 国際環境経済学科3年　阿部 純也

私は今回初めて伝右川再生会議に参加をさせていただいたのですが、水質調査の専門家と、県の担当者、そして私たち学生や地域の方々という異なる立場の者が集まり、会議を行うという方式に感銘を受けました。河川の浄化という課題は、住民だけの問題でもなく、また行政だけの問題でもありません。だからこそ、このように様々な視点を持つ人が集まり、多角的に話すことができる伝右川再生会議は、非常に重要な場であると感じました。

松枝ゼミの活動報告の様子

私たち松枝ゼミでは、伝右川の水質の調査・研究を通して、科学的な手法や知識を習得しながら自然の大切さを再認識することを目標に毎週1回、定期観測を行っています。今回の報告では、我々の活動の具体的な説明や、今後の展望についてお話しさせていただきました。詳細につきましては、2月11日に開催された「川の再生交流会 2023」にてポスター発表を行いました。

環境・国際団体Deco 国際環境経済学科3年　柳澤 佑佳
国際環境経済学科2年　崎井 瞳衣

サルベージについて活動報告しました。サルベージとは、川に不法投棄された自転車やバイクを吊り上げて川の整美を目指す活動です。参加する前と参加した後で、地域ボランティアに対するイメージが変わりました。また、貴重な体験ができてよかったなと思います。伝右川再生会議では、ほかにも川の生態調査やカヌーの活動が行われていることを知りました。地域一体となって、伝右川をきれいにしていくことが大切だと思いました。

「環境・国際団体Deco」のサルベージ活動報告

教務課 経済学部係の窓口から

獨協大学教務課経済学部係

経済学部生のみなさん、こんにちは。獨協大学教務課経済学部係です。

ここでは教務課について紹介します。まだ教務課に足を運んだことがない方も、教務課について知るきっかけになったら嬉しく思います。

教務課では、「挨拶・丁寧・正確」の窓口スローガンを掲げ、みなさんが利用しやすい窓口対応を心がけています。履修登録の相談や、試験・成績に関わる問い合わせを主に受け付けています。

みなさんは経済学部履修相談チャット(チャットボット)を利用したことがありますか?PorTaⅡのHOME画面にあるリンクからアクセスすることができます。

コロナ禍をきっかけに導入した新しいシステムです。今は導入している企業も多く、どこかで目にしたことがあるかと思いますが、チャットから質問項目を選ぶと自動的に回答が表示される仕組みになっています。経済学部履修相談チャットでは、チャットだけでは解決しない場合にフォームから問い合わせることができ、教務課からの回答がメールで届きます。

チャットボットの導入により、対面で履修相談をしていた時よりも自分の空き時間にあわせて問い合わせができるようになりました。教務課の窓口時間が過ぎても、フォームから問い合わせをしておけば、だいたい一営業日中(※質問によって異なります)には自分のメールに回答が届いています。

ここでみなさんに意識してほしいことが1つあります。手軽に問い合わせができる環境があることはとても便利なことですが、教務課に寄せられる問い合わせの多くは履修の手引やシラバス、授業時間割表にすでに記載されていることがほとんどです。つまり、教務課に問い合わせるよりも自分で調べた方が早く疑問を解決できるということです。

授業においても、社会生活においても、「自分で調べること」は非常に大切なスキルです。大学生のうちに自分で考えること、調べることを意識して行動できるようになると、将来必ず役立つときが来ます。もちろん、自分で調べた結果分からないことや不安なことがあれば教務課までご相談ください。

最後になりましたが、みなさんの大学生活が実り多いものとなるよう、教務課一同全力で応援しています。どうぞよろしくお願いします。

獨協大学教務課経済学部係　真庭 はるか

経済学部生のみなさん、こんにちは。2021年5月より教務課経済学部係の担当として働いています、真庭はるかと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は獨協大学の卒業生ではありませんが、縁あって2018年4月に獨協大学に入職いたしました。大学時代は被服学(衣服など「人が身につけるもの」について総合的に研究する学問)を専攻し、衣服の機能性はもちろんのこと、着る人の感性を満足させ、健康を維持できる、種々の環境に連合する衣服について研究していました。振り返ってみると、勉強漬けの毎日でしたが、現在の自分の人生にとって糧となるものであったと思います。在学生のみなさんにも、獨協大学での学生生活の中で経験したことを糧として、自信をもって社会へ羽ばたいていただけたらと思います。

さて、みなさんは大学にある設備や窓口を利用したことはあるでしょうか?私は入職当初、獨協大学の施設・設備をはじめとする学習環境が整っていることや窓口対応が丁寧で充実していることに非常に驚きました。もちろん母校にも教務課や学生課といった窓口はありましたが、履修登録時に相談にのってくれたり、困ったときに相談にのってくれたりする窓口はありませんでした。大学生なので、自分自身で考えて行動するということは当たり前かもしれませんが、何か困ったことがあった時に相談できる窓口があることは、大学生当時の私からすると羨ましい限りです。

獨協大学には、教務課のほかにキャリアセンターやカウンセリングセンターなどの窓口や図書館やICZ・CLEASなどの学生が利用できる施設がたくさんあります。4年間という限られた大学生活や大学卒業後のキャリアを充実したものにするためにも、こういった窓口や施設を大いに利用してください。

大学の窓口に相談するのは少し勇気がいると感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、ご安心ください。私たちはみなさんに寄り添った対応を常に心がけています。不明点や相談事があればお問い合わせください。今後もみなさんが充実した大学生活を送れるように精一杯サポートをさせていただきます。

退職教員挨拶

いろいろな人に守られながら優しくっていい子ばかりの獨協の子たちに囲まれて幸せな26年間でした

経済学部経営学科　内倉 滋

2023年3月をもって、26年間勤めた獨協大学を定年で退職いたします。この間、多くの先生方や職員の皆さんに、本当にお世話になりました。まだ在籍されてらっしゃる方々には一人ひとり感謝の気持ちをお伝えしたいのですが、とりあえずこの場をお借りして、心より御礼申し上げます。

この26年間、色々な思い出がございます。初めての全学教授会で就任の挨拶をしたときのこと;初めてのたった3人のゼミ生との思い出;等々、26年前のことでもまだ鮮明に記憶に残っている思い出がたくさんあるのですが、ここでは、最後の1年間に起きた2つのエピソードを紹介して、退職の挨拶に代えたいと思います。

1つ目のエピソードは、2022年7月12日(火)のことです。4限のゼミ(3年)で、すごいサプライズがありました。じつは前日が私の70歳の誕生日だったのですが、教室に行きましたら教室が“お誕生日会”の雰囲気に模様替えされていました。中に入っていくと同時にクラッカーで祝福され、黒板には、色んなメッセージが書いてありました。巨大な7と0の風船[←両方かかえると「70」になります。]や、サバランのバースデイケーキまで用意されていました。同じ教室で3限も2年のゼミをやっていますので、3限と4限のわずかな間に私に内緒で準備したみたいなんです。この日だけ、3限の2年のゼミが終わって教室を出ると、たくさんの3年ゼミ生がいました。“どうしたの?”ってきいても、“いえ別に”みたいな感じでした。今思うと、全員でスタンバイしていたんですね。サバランにも、驚きました。私がALC.強めのサバランが好きだということを先輩ゼミ長から聞いて、彼のお勧めの店まであえて買いに行ってくれたんだそうです。その日は、ゼミが終わった夕方から駅東口の焼き肉屋さんで、ゼミのコンパもありました。20名のゼミ生のうち15名もの人が参加してくれました。それも含めてその日は、一生涯記憶に残る素晴らしい一日になりました。

このエピソードには、続きがあります。翌々日(2022年7月14日(木))のことです。2限の授業(簿記原理)の最初に、2日前のゼミ生によるお誕生日会のサプライズのことを雑談しました。わずか2日前のことでしたので、話していましたら不覚にもこみ上げてくるものがあって、途中で言葉が詰まって話せなくなってしまいました。そうしたら、受講生のあいだから静かな静かな拍手が起こって、それがだんだん教室いっぱいに広がっていって‥。しばらく授業を開始できませんでした。

獨協の子たちって、本当に優しくっていい子ばかりです。そんな人たちに囲まれて、この26年間、私は幸せでした。

なお、ゼミ絡みでは、エピソードではないのですが、ごく最近に嬉しいことが1つありました。この原稿を提出する数日前に、ゼミOBで2018年3月卒業の鈴木雅康君から、とても嬉しい知らせを受けたことです。東京経済大学から、会計学の専任講師(無期雇用)としての採用内定通知を受け取った、という報告でした。彼は公認会計士でもあるのですが、その点も含め、私の専任最後の年に私の思いを継いでくれるような人ができた気がして、わがことのように嬉しくなりました。

話しを戻して、2つ目のエピソードを紹介したいと思います。内容的には、1つ目のエピソードと真逆のイメージのものです。2022年9月28日(水)の午後2時すぎに、グラウンド脇の桜並木を東門に向かって歩いていましたら、守衛さん

が男の人と言い争ってるのが見えました。入構手続きをしないで構内に入っていこうとしたその人を、守衛さんが追いかけていって、言い争っていたようです。その男は、“なんだとてめえ”みたいな大きな声をあげ、守衛さんを振り切ってスタスタ歩いてきて、私とすれ違いました。守衛さん(1人でした。)から事情を聞き、“とにかく1人じゃ危険だから、中央棟の本部に連絡した方がいい”って話して、守衛さんが電話しようとしましたら、遠くからそれを見ていたその男が、猛スピードでこっちに向かってきました。警察にでも通報しようとしていると思ったのかもしれません。これはまずいって思いました。そうしたら守衛さんは、私や入構しようとしていた学生[←10数人が、中に入れずに立ちすくんでいました。]の前に立って、あらためて入構手続きをするよう大声で伝えました。その男は、“なんだとこのおやじ”みたいな大声をあげ、我々の前に立っている守衛さんの目の前で止まって、“ついてこい。外でけりを付けよう”って言って、門の外に出るよう促しました。そのときの守衛さんの対応は、素晴らしいものでした。彼は、“私は、ここの門を守らなければならない。私は、ここにいて、この先生方(と言っても私1人)や学生を守らなければならない。だから門の外には行けない。”って言い返したんです。その男は、また、“なんだてめえ”って大声を出し、守衛さんの目の前まで戻ってきました。このときこそ、もうだめだと思いました。でも、無言のにらみ合いのあと、口汚い捨てぜりふ[←なんて言ったか忘れましたが‥]を大声ではいてその男は、門の外に出て行きました。

その守衛さんの対応には、本当に感動しました。でも、今、色々と思うことがあります。1つは、私は獨協のその場にいた唯一の専任者なのだから、途中からは私も守衛さんの脇に立って、2人でその男と対峙すべきじゃなかったのかな、ということ。2人だったらその守衛さんも、心丈夫だったと思います。もう1つは、スマホで一部始終を撮影しておくべきだったんじゃないかな、ということ。最悪刑事事件になったとき、証拠になりますし。そのどちらも、私にはできませんでした。そうする勇気がありませんでした。その場を離れなかったのが、精一杯でした。そのときほど、自分はだめな人間だと思ったことはありません。ときどき教室で、“ここで何か起きたら、私が先頭に立ってみんなを守るよ”なんて話しているのですけれど、本当に例えば教室にそのときのような男が侵入してきたときに、果たしてみんなを守ってあげられるだろうか?毅然とした首尾一貫した態度で対応していけるだろうか?そんな自問自答を繰り返しました。でも、得られた結論は、ごくありふれたものでした。それは、大学というのはいろいろな職域のたくさんの人たちによって出来上がっているものなんだ、ということ。そしてそこで働く人々は、学生もですが、そうした多くの人たちによって守られているんだ、ということ。私もまたこの26年間、そうした多くの人たちによって守られてきたんだ、ということを、退職を半年後に控えたこの日に、あらためて認識させられました。

“私は、ここにいて、この先生方や学生を守らなければならない。だから門の外には行けない。”っていうあのときの守衛さんの言葉や態度は、今でも脳裏に焼き付いて残っています。退職したあとの人生においても、ずっとずっと忘れないようにしたいと思っております。

では、これで。皆様方それぞれの今後の人生が、平凡なくらいに健康に恵まれて、だからこそ充実した一生になりますことを祈念して、筆を置きたいと思います。

いろいろな人に守られながら優しくっていい子ばかりの獨協の子たちに囲まれて幸せな26年間でした。

教員業績紹介（2022年度）

経済学部に在籍している教員の近年の業績について、①著書 ②論文 ③翻訳・書評・その他 ④学会・研究会報告 ⑤社会貢献に分け、いくつか紹介します。なお詳細については、大学ホームページの「教員紹介」および「教員業績紹介」に掲載されています。

経済学科

徳永　潤二

①著書

Money, Finance, and Capitalist Crisis, Routledge, 2022（chapter in edited book）.

④学会・研究会報告

「財政赤字は悪なのか?:現代貨幣理論（MMT）を批判する」シノドス・トークラウンジ、2022年6月15日

本田　浩邦

②論文

「2022年中間選挙とアメリカの行方」（『経済』2023年1月号、pp. 84-95）

「（研究ノート）イギリス初期社会主義の社会改革構想――トマス・ペイン」（『ベーシックインカム研究』第1巻、第4号、2022年10月、pp. 53-69）

③その他

「米中間選挙は共和党優位の情勢か、トランプ信者の「現在地」」ダイヤモンド・オンライン、2022年11月4日

「日米『インフレ格差』急伸、物価安定を日本が喜んではいられない事情」ダイヤモンド・オンライン、2022年8月11日

「米経済に急ブレーキかけた物流危機、サプライチェーン混乱の「隠れた真実」」ダイヤモンド・オンライン、2022年4月25日

「トランプ復活に追い風？米中間選挙「三つどもえインフレ論争」の行方」ダイヤモンド・オンライン、2022年2月11日

④研究報告

「チリ・クーデター50年――アメリカの関与を中心に」日本科学者会議第24回総合学術研究集会G1分科会（オンライン）、2022年12月10日

「イギリス初期社会主義における貧困救済思想」日本科学者会議第24回総合学術研究集会G6分科会（オンライン）、2022年12月3日

「アメリカ経済はどうなる――中間選挙結果から考える」基礎経済研究所第15回東京支部WEB研究会（オンライン）2022年11月26日

「アメリカのベーシックインカム――中間選挙・直接給付・インフレーション」法政大学大原社研ベーシックインカム運動研究会、2022年11月19日

「アメリカのインフレーション」アメリカ経済研究会（オンライン）、2022年2月26日

⑤社会貢献

アメリカ経済史学会学会賞選考委員長（2021年～現在）

ベーシックインカム学会理事（2022年4月～2022年11月）

経営学科

井上　靖代

②論文

「米国都市部（と地方）における公共図書館の学校支援及び学校図書館の位置づけ」

日本学習社会学会年報 / 日本学習社会学会年報編集委員会編　18号 48-51p

③翻訳・書評・その他

「IFLA理事会報告」図書館雑誌/日本図書館協会　2022年12月号

「IFLAの戦略―理事会の議論から」“「図書館界の国際交流―IFLAダブリン大会から見えてくること」”

図書館総合展2022　2022年11月4日

⑤社会貢献

草加市図書館協議会委員，大阪府立図書館協議会委員

大坪　史治

②論文

「Content Analysis of Non-Financial Reporting of Sustainable Companies」『獨協経済』第112号，pp17-25，2022年4月

「非財務情報開示と企業価値の関係に関する実証分析－統合報告に対する株価反応についてのイベントスタディ－」『環境共生研究』（獨協大学環境共生研究所）第15号，pp87-98，2022年3月

黒川　文子

①著書

『自動車業界の動向としくみがよ～くわかる本　第4版』、秀和システム、2022年5月。

②論文

「EVエコシステムにおけるトヨタとホンダのEV競争戦略」環境共生研究、第15号、環境共生研究所、69～85頁、2022年3月。

⑤社会貢献

埼玉県国土利用計画審議会委員

平井　岳哉

②論文

「三井物産の再合同過程におけるゼネラル物産と東京食品の不

参加について」獨協大学経済学部『獨協経済』113号、2022年9月、P23～P35。

③翻訳・書評・その他

書評「植田浩史・三嶋恒平編著『中国の日系企業　－蘇州と国際産業集積－』(慶應義塾大学出版会)」経営史学会『経営史学』第57巻第2号、丸善雄松堂、2022年9月、P53～55。

国際環境経済学科

樋田　勉

③翻訳・書評・その他

日本統計協会 編『統計でみる日本 2022』, 第6章「物価・地価」, 日本統計協会, 2022.

④学会報告

樋田勉「コロナ禍における消費者物価と小売業の価格設定」, 2022年度統計関連学会連合大会, 成蹊大学.

市瀬雄一, 渡邊ともね, 樋田勉, 東尚弘.「患者体験調査におけるがん長期療養患者の実態」第 32 回 日本疫学会学術総会, 2022年.

⑤社会貢献

総務省 物価指数研究会委員

総務省統計研修研究所 客員教授

総務省統計研究研修所 匿名データ有識者会議委員

厚生労働省 厚生労働統計の整備に関する検討会委員

国土交通省 建設工事受注動態統計調査の不適切処理に係る遡及改定検討会議委員

国土交通省 統計品質改善会議委員

草加市 地域経営委員会委員

青山学院大学 青山データサイエンス教育コンファレンス DS 教育評価委員会委員

エム・アール・アイリサーチアソシエイツ(株)「中小企業実態基本調査に係る結果検証等に係る研究会」委員

三菱 UFJリサーチ&コンサルティング(株)「外国人の雇用状況に係る統計調査の新設に関する研究会」委員

(株)三菱総合研究所「介護事業経営実態調査等の有効回答率向上等に関する調査研究事業」委員

浜本　光紹

②論文

「循環経済をめぐる研究動向と政策課題」『環境共生研究』第15号, 2022年。

⑤社会貢献

吉川市環境審議会会長(2022年10月28日)

廃棄物・リサイクル分野の脱炭素化推進事業の検証評価委員会委員(2022年10月14日・12月27日)

藤山　英樹

①著書

数理社会学会・数理社会学辞典刊行委員会編『数理社会学辞典』, 2022年、丸善出版、について編集委員として参加し、以下の項目を執筆した。

「合理的選択理論と社会ネットワーク分析」pp.94-97.

「ネットワークの要素とその基本的な数学的定義」pp.202-205.

「中心性と中心化、卓越性」pp.214-217.

「ネットワークに関する統計的手法」pp.226-229.

③翻訳・書評・その他

書評:『その問題, やっぱり数理モデルが解決します:データ時代を生き抜くための数理モデル入門』浜田宏著、『理論と方法』37巻1号 2022年 数理社会学会、pp.140-141.

④学会・研究会報告

(研究会)

科研費・基盤研究(C)「現代日本企業のダイナミクスを探る役員および資本関係の多重ネットワーク分析」の研究会を研究代表者として主催し、議論をした。オンライン開催、2022年8月25日。

科研費・基盤研究(C)「感染症拡大抑制と社会・経済活動活性化を両立する社会ネットワーク形成政策」の研究会に研究分担者として参加し、議論をした。広島市立大学、2022年9月29日。

⑤社会貢献

草加高校・評議員, 草加市学園台自治会・会長代行

松枝　秀和

②論文

Measurement report: Method for evaluating CO_2 emission from a cement plant by atmosphere O_2/N_2 and CO_2 measurements and its applicability to the detection of CO_2 capture signals. Atmospheric Chemistry and Physics Discussions (2022), doi.org/10.5194/acp-2022-570(共著)

Spatiotemporal variations of the $\delta(O_2/N_2)$, CO_2 and δ (APO) in the troposphere over the western North Pacific. Atmospheric Chemistry and Physics (2022), 22, 6953–6970, doi.org/10.5194/acp-22-6953-2022(共著)

④学会・研究会報告

民間航空機観測により捉えられた米国西部森林火災由来CO_2変動. 日本気象学会2022年度秋季大会, 2022年10月(共著)

南鳥島における大気中の二酸化炭素安定同位体比の長期観測. 日本気象学会2022年度秋季大会, 2022年10月(共著)

民間航空機による東京上空のCO_2濃度の長期観測と国内インベントリ監視への適用. 日本気象学会2022年度秋季大会, 2022年10月(共著)

⑤社会貢献

国立研究開発法人国立環境研究所・研究協力(2022年10月～2023年3月)

気象庁気象研究所・客員研究員(2022年4月～2023年3月)

Network 経済　2023 Vol.43・44

特集　卒業後のキャリア形成を見据えて〜インターンシップ

Network 経済　2023 Vol.43・44
年2回発行予定　ⓒ獨協大学経済学部

編集・発行　獨協大学経済学部ネットワーク経済編集委員会
〒340-0042　埼玉県草加市学園町1番1号

編　集　部　TEL 048(946)1929　FAX 048(943)3153
E-mail　deaneco@stf.dokkyo.ac.jp

企画デザイン・印刷　望月印刷株式会社

※本誌の内容を許可なく転載・放送することを禁じます。

2023年3月31日

Published by Faculty of Economics, Dokkyo University
Supported by Mochizuki Printing Co.,Ltd.

FSC ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C004782

GOLD+ 環境保護印刷
P14-0181

この印刷物は、E3PAのゴールドプラス基準に適合した
地球環境にやさしい印刷方法で作成されています
E3PA：環境保護印刷推進協議会
http://www.e3pa.com